筑波大学先史学・考古学研究調査報告　5

古墳測量調査報告書　I

— 茨城南部古代地域史研究 —

筑波大学歴史・人類学系

1991

例　言

1．本報告書は，筑波大学歴史・人類学系考古学研究室が主体となって昭和53年度以来進めてきた「茨城南部古代地域史研究」の成果の一部である。

2．上記期間のうち，昭和61・63・平成１・2 年度の研究は筑波大学学内プロジェクト研究費（助成研究）の助成を受けて実施した。

昭和61年度	研究代表者	岩崎　卓也	研究分担者 1名
昭和63年度	研究代表者	西野　　元	研究分担者 5名
平成元年度	研究代表者	岩崎　卓也	研究分担者 5名
平成２年度	研究代表者	西野　　元	研究分担者 5名

3．上記の研究は，考古学的発掘・測量調査をはじめ，文献史学，地形学，生態人類学等の範囲にわたるが，本報告書には，昭和61年度から平成元年度までの間に測量を実施した古墳4基と，平成２年度までに表面採集・既発見遺物の実測を行った４遺跡に関する研究成果を収めた。他の成果については，今後研究がまとまり次第逐次刊行する予定である。

4．本報告書の執筆は，岩崎卓也，西野　元，滝沢　誠，白石典之，三木ますみ，谷中　隆が項目ごとに分担して行った。執筆者名は各文の末尾に記した。

5．本報告書の編集は西野　元が行い，滝沢　誠，三木ますみが協力した。

6．調査，研究の実施，報告書の作成に当たっては多くの方々のご協力を賜った。以下に記して謝意を表する次第である。

潮田健一，小口長太郎，尾見忠重，斉藤一郎，武井重吉，広瀬きん，峰岸純亮，宮山区，薬師寺九右衛門

下館市教育委員会，明野町教育委員会，八千代町教育委員会，八千代町歴史民俗資料館，千代川村教育委員会，出島村教育委員会

7．我々と研究生活を共にした岡崎里美嬢は，交通事故により平成元年２月22日帰らざる人となった。その悲しみは言葉に言い尽くせないものがある。この報告書を同嬢の霊前に捧げ，謹んでご冥福をお祈りする。

目　　次

例　言

Ⅰ　前　言 …… 1

Ⅱ　調査・研究の経過 …… 2

Ⅲ　小貝川中流域における古墳の調査 ―下館市・明野町所在の古墳―
　1．遺跡の環境 …… 6
　2．葦間山古墳 …… 12
　3．台畑古墳 …… 18
　4．鎌田遺跡 …… 22
　5．鷺島古墳 …… 30
　6．宮山観音古墳 …… 35

Ⅳ　鬼怒川中流域における古墳の調査 ―八千代町所在の古墳―
　1．遺跡の環境 …… 40
　2．香取神社古墳 …… 45
　3．仁江戸11号墳 …… 52
　4．別府遺跡 …… 54

Ⅴ　総　括 …… 58

文　献 …… 61

挿図目次

第１図　遺跡周辺の地形と古墳時代の遺跡分布(1) …… 7
第２図　遺跡周辺の地形と古墳時代の遺跡分布(2) …… 10
第３図　葦間山古墳墳丘測量図 …… 13
第４図　葦間山古墳表面採集遺物実測図 …… 16
第５図　台畑古墳墳丘測量図 …… 19
第６図　鎌田遺跡出土土器実測図(1) …… 24
第７図　鎌田遺跡出土土器実測図(2) …… 26
第８図　鷺島古墳出土円筒埴輪実測図 …… 30
第９図　鷺島古墳出土形象埴輪実測図(1) …… 32
第10図　鷺島古墳出土形象埴輪実測図(2) …… 33
第11図　宮山古墳墳丘測量図 …… 37
第12図　遺跡周辺の地形と古墳時代の遺跡分布 …… 41
第13図　仁江戸古墳群分布図 …… 42
第14図　香取神社古墳墳丘測量図 …… 47
第15図　香取神社古墳表面採集遺物実測図(1) …… 49
第16図　香取神社古墳表面採集遺物実測図(2) …… 50
第17図　仁江戸11号墳出土遺物実測図 …… 53
第18図　別府遺跡表面採集遺物実測図(1) …… 55
第19図　別府遺跡表面採集遺物実測図(2) …… 56

表目次

第１表　仁江戸古墳群 …… 43

図版目次

図版１　葦間山古墳
　１．葦間山古墳全景（西から）
　２．表面採集遺物（1/2）
図版２　台畑古墳
　１．台畑古墳全景（西から）
　２．灯火山古墳全景（西から）
図版３　鎌田遺跡
　土師器（1/2・1/4）
図版４　鎌田遺跡
　土師器（1/4）
図版５　鷺島古墳
　１．円筒埴輪（1/2）
　２．人物埴輪（1/4）
図版６　鷺島古墳・宮山観音古墳
　１．人物埴輪（1/4）
　２．馬形埴輪（1/4）
　３．宮山観音古墳遠景（南から）
図版７　香取神社古墳
　１．香取神社古墳全景（西から）
　２．壺形埴輪（1/4）
図版８　香取神社古墳・別府遺跡
　１．壺形埴輪（1/2）
　２．土師器・砥石（1/4）

Ⅰ 前 言

本学が筑波の地に創設されて以来十数年，筑波地域を中心として茨城南部古代地域史研究を継続して行い，成果の一部を発表してきた。我々の研究の方向性については従前の報告書ですでに述べている（岩崎　1982）ので，ここではごく概略を述べることとする。

地域史研究の蓄積に立脚した歴史の総合的把握に関しては，重要な課題として早くから指摘され，様々な方法が提示されてきたところである。常陸国ないしは東国に関しても諸先学により幾多の試みがなされているが，比較的広い地域を対象とする研究であった。

こうした中で，我々は小地域を対象として多方面からの詳細な分析を行うことにより地域の具体的歴史像を描き出すことを試みた。それは，とりもなおさず日本歴史研究における古代地域史研究の方法的モデルを追求しようとする試みでもあった。

以上の課題に対して，時代としては，古代という時間幅の中で国家成立期に当たる古墳時代を，地域としては筑波国域を対象とすることとした。方法的には考古学的研究を中心としながらも，史学，民俗学，地形学，地理学，分析化学等の関連領域を含めた多角的研究を行うこととした。

考古学的調査・研究については，古墳を中心とする遺跡群の分布調査，測量調査等による現状把握，地域に所在する出土遺物の調査を中心に，必要により最小限の発掘調査も実施することとした。

調査・研究の経過については後述するが，この十数年の中で得られた成果も幾つかあるものの，新たに生じた課題の方が遥かに多いと言わねばならず，今後さらに長期にわたる研究が必要とされよう。

（西野　　元）

Ⅱ　調査・研究の経過

今回報告するのは，昭和61年度から平成２年度の間に行った考古学的調査・研究成果の一部であるが，茨城南部古代地域史の研究は過去十数年にわたって継続して進められてきているので，先行研究の経過についてもその概略に触れておく。

なお，関係諸領域の研究成果については別途にとりまとめることを予定しているので，ここでは考古学的調査を中心に述べる。

１．昭和60年度以前

古代地域史研究の萌芽ともいうべき段階から本格的研究の展開に至る時期である。

創設間もない本学において，学生の研究団体である考古学研究会は昭和48年以降旧筑波町の遺跡分布調査，古墳群の測量調査を開始した。この分布調査の成果が端緒となって，桜塚古墳の重要性が認識されるに至った。

地域首長墓としての桜塚古墳の性格解明のため，昭和53年度には学内プロジェクト研究費の交付を受けて（研究代表者　増田精一）同古墳の発掘及び筑波地方古代史研究が本格的に開始された。その成果に立脚し研究の深化を図るため，昭和54～56年度には文部省特定研究経費による「筑波古代地域史の研究」（研究代表者　増田精一），昭和57年度には学内プロジェクト研究費による研究（研究代表者　増田精一）として筑波国地域内の代表的古墳を対象とした調査，研究が進められるに至った。

その後，昭和57～59年度には文部省科学研究費補助金の助成を受けて茨城県南部地域について研究を行った。

こうして研究が進むにつれ，かつての筑波国の中心と推定される桜川中流域における首長系譜の様相は次第に明らかになってきたが，一方では周辺に所在する大型古墳との関係，さらには筑波国の範囲をいかに把握するかといった新たな課題に直面した。こうした課題に対応するには，筑波国に隣接する新治，真壁，結城等も含めて広く茨城県南部を対象として研究を進めることが必要となった。

２．昭和61～平成２年度

（１）昭和61年度

筑波地域において発掘調査を行った桜塚古墳，甲山古墳の研究とともに，周辺地域との対比研究のため結城郡八千代町に所在する仁江戸古墳群および太田古墳の調査を行った。

桜塚古墳は築造年代が4世紀にまで遡り，筑波地域において最も古い首長墓と考えられるに至った。

甲山古墳は6世紀代の築造で，破壊が著しいため墳形を確認し得ないものの，前方後円墳であったとすれば，八幡塚古墳との年代関係において首長系譜の解明が課題となった。

仁江戸古墳群については前年度末に考古学研究会の学生による踏査が行われ，前方後円墳2基を含めて23基からなるこの地域では大型の古墳群としての姿が明らかとなったほか，同古墳群第11号古墳出土品や，5世紀前葉に属する土師器を出土する別府遺跡の存在も知られ，遺跡群の重要性が認識されるに至った。

4月から5月にかけて同古墳群の主墳である香取神社（仁江戸古墳群第1号）古墳の測量調査を実施し，墳丘に壺形埴輪を配列した全長約70mの前方後円墳であることを確認した。

また，11月には同町の協力により太田古墳の発掘調査を行い，主体部の箱式石棺から人骨のほか，乳文鏡，玉類など豊富な副葬品を検出し，6世紀後半期の古墳について解明することができた。

なお，本年度の研究成果のうち，桜塚・甲山両古墳の成果刊行については後述するほか，太田古墳については平成元年に別に報告書を刊行したので，本報告書には収録していない。

（2）昭和63年度

筑波国に接する真壁郡域内の古式前方後円墳を対象とし，7月に下館市徳持の葦間山古墳と，真壁郡明野町に所在する灯火山・台畑・宮山観音の3古墳とについて現況を踏査し，検討の結果，63年度は明野町域の古墳を取り上げることとした。3基のうち灯火山古墳は樹木，下草が繁茂し，測量を行うのは極めて困難と判断されたので，小貝川流域の台畑古墳と，桜川支流の観音川流域の宮山観音古墳の2基を対象とし，両河川流域における古墳のあり方の違いを把握するための測量調査を行った。

12月，古墳の土地所有者，所在地区の区長等関係者の方々の了承などについて町教育委員会に協力をお願いし，快諾を得た。調査は昭和64（平成元）年1月7日から約2週間を費やして実施した。

また，測量調査と並行して地域内の既発見遺物について調査し，鷺島古墳出土埴輪の整理，実測を行った。

12月に現地を訪れた際，灯火山古墳は掘削の最中で，後円部頂が深く掘り凹められ，主体部は完全に破壊された状況に遭遇した。直ちに町教育委員会にこの事実を通報し，早急に善処すべきことを要望した。

墳丘は掘削により変形していたが，樹木が伐採されていたため墳形の概略を観察することはできた。後円部が比較的高いのに対し，前方部は低く，かつ幅が狭く長い形状を呈し，古式古墳の特色を備えていたことが窺えた。

無謀な遺跡破壊により，地域史研究に大きな障害を来したことは誠に遺憾であった。

(3)平成元年度

葦間山古墳の測量調査とともに，岩井市に所在する高山古墳他3古墳の調査を行った。

葦間山古墳は，前年度に調査を行った台畑古墳が含まれる村田古墳群の北に単独で立地する前方後円墳で，この地域における最も有力な首長墓として重要な位置を占めると考えられる。測量調査は平成2年3月に行い，約2週間を要した。

岩井市においては，高山古墳の発掘調査のほか，香取塚古墳，半谷古墳群，矢作稲荷塚古墳の測量調査を実施した。高山古墳は，古く明治45年土取りにより破壊され，その際に出土した遺物は東京国立博物館に収められている。今回は露出したままの石室の清掃，発掘のほか，墳形，規模を確認するため周溝を追求したが，遺存状況が悪く確認するに至らなかった。

調査は，平成2年3・4月の2回，約2週間にわたって行った。

なお，岩井市関係の調査成果については別途刊行を予定しているので，本報告書には収録していない。

(4)平成2年度

下館市鎌田遺跡出土資料の調査研究，新治郡出島村所在牛渡銚子塚古墳の測量調査を実施したほか，従前の成果の総括的研究を行った。

7月，下館市域に所在する古墳の現況踏査を行ったが，その折りに同市教育委員会が所蔵する鎌田地区出土の五領式土器を実見した。圃場整備工事に伴っての出土であり，遺跡の詳細は不明であるが，土器の組合せからみて集落遺跡と考えられ，小貝川を挟んで葦間山古墳の対岸に位置することから，同古墳と密接な関係がある重要な遺跡と判断した。幸いにも市教育委員会のご好意により資料を借用することができ，整理，研究を行った。

古墳の測量調査については，筑波国に隣接する新治地域を対象とした。牛渡銚子塚古墳は霞ヶ浦北岸の小支谷に面した台地上に立地し，全長約70mと中規模の前方後円墳であるが，小円墳1基が隣接し，小規模ながら独立した古墳群を形成している。平成3年3月に測量を行ったが，成果については現在整理中であり，本報告書には収録しなかった。

従前の調査成果の取りまとめに関しては，桜塚古墳（昭和53年度発掘），甲山古墳（昭和55年度発掘），の資料について整理，研究を行い，報告書原稿を作成した。次年度に刊行する予定である。

以上が経過の概略であるが，宮山観音古墳に関しては，この間に地元住民の方々と町当局の御尽力により保存整備計画が具体化し，「宮山ふるさとふれあい公園」として平成6年度完成予定で作業が進められている。地域文化の保存伝承と創造に我々の研究成果がいささかでも役に立つことができ，本学の「開かれた大学」という理念の一端が実を結びつつあることを喜びたい。

（西野　　元）

3．調査参加者（筑波大学学生　五十音順）

（大学院）

故岡崎里美，岡林孝作，三木ますみ，白石典之，滝沢　誠

（学　群）

赤堀　徹，金子(旧姓有田)貴紅葉，石井千佳，稲垣圭子，岡林　良，角谷教年，國井弘紀，小宮山隆，佐藤　啓，白根義久，鈴木康之，高橋健司，田中　裕，綱沢啓芳，鳥居晶子，内藤弥穂，中森敏晴，那須利治，二階堂貴士，西山眞理子，馬場かをり，早瀬一美，東　憲章，福田美樹，本多昭宏，松野憲雄，武蔵美和，望月保宏，桃崎祐輔，谷中　隆，山田富美，山田康弘，吉田和美，吉田美和子，和田　健

Ⅲ　小貝川中流域における古墳の調査

―下館市・明野町所在の古墳―

1．遺跡の環境

(1)周辺の地形

茨城県西部地域の多くは，広大な台地によって占められている。台地は，小貝川，鬼怒川などの南流する大河川やこれらの支流を含めた多くの河川によって区切られ，細長い小台地に分かれ，河川流域は沖積低地が形成されている。

今回，調査の対象としたのは，小貝川の中流域にある遺跡で，行政区域では下館市および真壁郡明野町に存在する。小貝川は，栃木県東南部の芳賀地方を源とし，茨城県南西部をほぼ南流し，利根川に合流する河川である。下館市の南方で，五行川，大谷川が合流しており，流域には，幅3～4kmの沖積低地が形成されている。

小貝川低地東側の台地の縁は，比高15～20mの急斜面，場所によっては崖となって低地に臨んでいる。この台地面は30～40mの標高で，東縁は桜川の沖積低地によって画されているが，その間も観音川など，南流するいくつかの小河川によって開析され，分断されている。これらの河川の多くは，小貝川ではなく，明野町の東南部で，桜川に合流している。桜川は，西茨城郡岩瀬町に発し，八溝山地の西の裾を巡って，霞ヶ浦へと流れる河川であるが，流量の割に幅2～3kmの沖積面は広く，かつて古鬼怒川の河道であったためだとする説がある（池田1981)。小貝川低地西側も標高30～40mの台地が続き，その西端を鬼怒川の本流が流れている。やはり南流する小河川によって，細長い小台地群に分断されている。

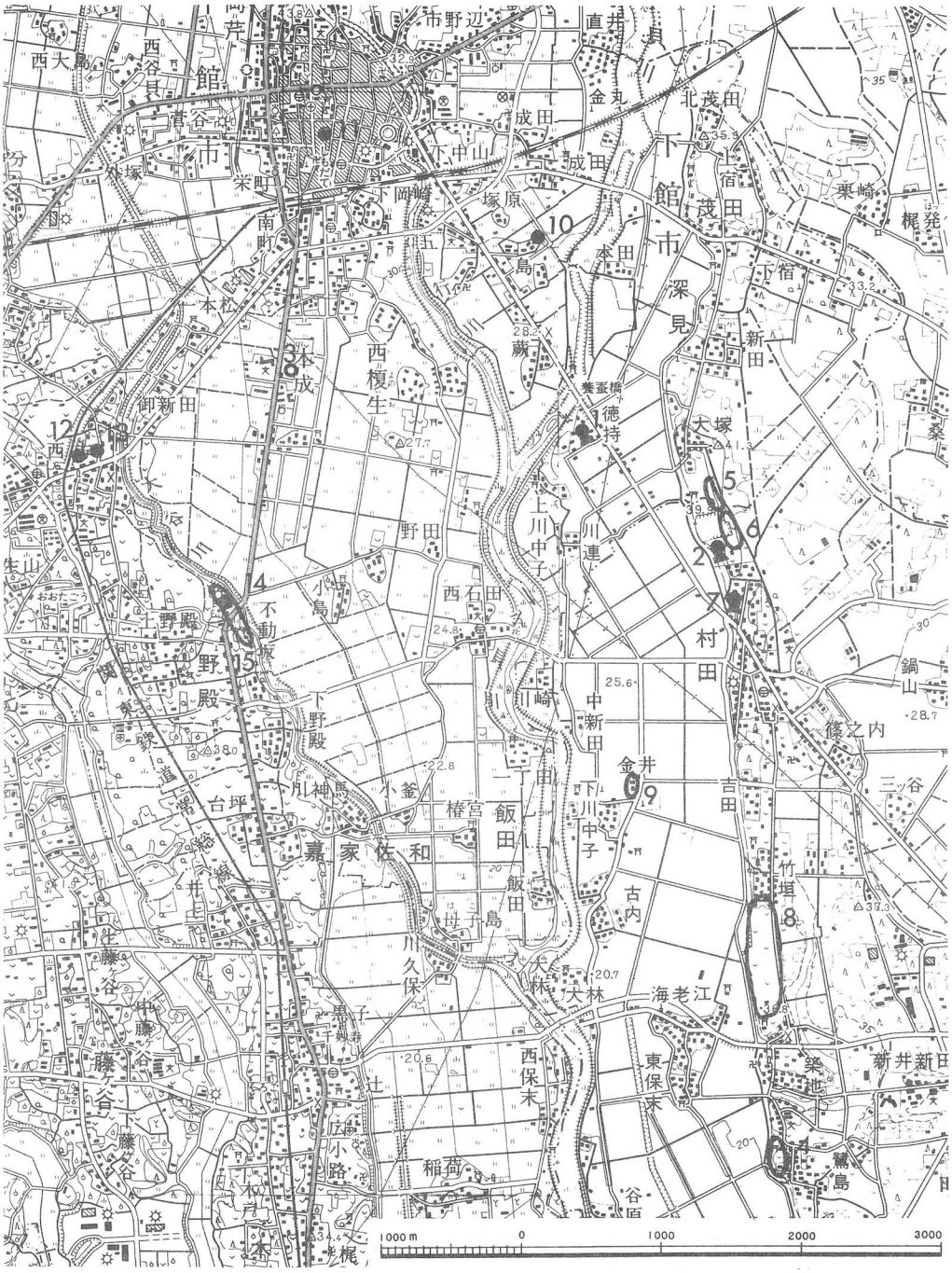
(2)古墳時代の遺跡

この地域の古墳を中心とした古墳時代の遺跡を，小貝川の流域と，桜川の流域とに分けて，概観してみることとしたい。

a．小貝川流域（第1図）

小貝川左岸の台地には，北から村田古墳群，藤塚古墳群(8)，鷺島古墳群(4)が存在している（明野町史編さん委員会　1985)。中でも村田古墳群は大型前方後円墳を含む重要なものと判断し，今回調査の対象とした。村田古墳群という名称は，本来は明野町村田地区に所在する，台畑・灯火山両前方後円墳に付けられたものだが，ここは明野町と下館市の境界上にあり，古墳の分布も両市域にまたがって一つのまとまりを形成していると思われるので，これらを含めて考えたい。

台畑古墳(2)，灯火山古墳(7)は，低地を望む台地縁辺部に並ぶように築造された大型の前方



第１図　遺跡周辺の地形と古墳時代の遺跡分布（１）

1.葦間山古墳　2.台畑古墳　3.鎌田遺跡　4.鷺島古墳群　5.南台古墳群・南台遺跡　6.えんなみ台遺跡　7.灯火山古墳　8.藤塚古墳群　9.吉田金井遺跡　10.島古墳　11.薬師古墳　12.西方古墳　13.西方新畑古墳　14.野殿古墳　15.不動坂遺跡

後円墳である。これまで詳細は明らかにされていないにもかかわらず，全長約100ｍとされていた灯火山古墳は，私たちの測量調査の直前に，その主要部分は記録もないまま惜しくも破壊されてしまった。その後，部分的な確認調査が行われている（瀬谷　1990)。台畑古墳の北の台地上，下館市大塚地区には南台古墳群(5)・北台古墳群があるが，北台古墳群はすでに失われてしまっている。この付近の台地上一帯は，明野町でえんなみ台遺跡(6)，下館市で南台遺跡(5)と呼ばれる遺物散布地となっており，縄文時代から奈良・平安時代までの遺物が採集されている。この台地下の低地上，小貝川にほど近い下館市徳持地区に，台畑，灯火山古墳をはるかに上回る大型前方後円墳の葦間山古墳(1)が築造されている。

藤塚古墳群は村田古墳群から３kmほど南に位置し，明治期には８基の古墳があったことが記録されているが，いま墳丘はすべて削平されてしまっている。うち３基の石棺が，明野町立明野中学校に移築されているほか，直刀，鉄鏃，耳環など若干の出土遺物が残っている。さらに南にある鷺島古墳群も現在，墳丘が削平されてしまっているが，かつて２基の円墳が存在したらしい。埋葬施設，副葬品などは明らかではないが，ここから出土したとされる円筒および形象埴輪が地元に保管されている。これらの古墳群も台地縁辺部にあり，周辺は古墳時代を含む遺物散布地となっている。

この小貝川左岸の台地上には，他にも古墳時代の遺跡が多く確認されている（明野町史編さん委員会　1983)。前期の土器を出土するものが７遺跡を数え，そのほとんどから弥生時代後期の土器も採集されている。弥生時代以降，集落が営まれてきた台地と思われるが，発掘調査が行われた遺跡はなく，詳細はわからない。

小貝川の右岸台地は大谷川の低地により南北に分断されている。南側の台地は，大谷川に沿うように続き，その縁辺に古墳時代の遺跡が立地している。下館市西方地区に西方古墳(12)・西方新畑古墳(13)，その南方の野殿地区には，野殿古墳(14)などがある（下館市教育委員会 1985)。西方古墳は，高さ約８ｍで円墳と見られているが，詳細はわからない。西方古墳の西100ｍのところにあるのが，径約15ｍの円墳である西方新畑古墳である。野殿古墳は，削土作業中に主体部が発見された。これは石材を小口積みにして壁体を構築した竪穴系の主体部で，人骨２体分と刀，刀子，鉄鏃，耳環などが出土している。この一帯の台地縁辺部は不動坂遺跡という，縄文時代から古墳時代にかけての遺物散布地であったが，現在は消滅してしまっている。

北側の台地は五行川右岸に，北から細長い舌状に伸び，下館市街地の南で終わっている。そこには，薬師古墳(11)，富士東古墳群（下館市教育委員会　1985）がある。薬師古墳は，下館市大町で発見された古墳の主体部を，薬師町に移設復原したもので，野殿古墳と同様の構造のものである。富士東古墳群は下館市街地の北の中館地区にあり，浅間山古墳，ふたどこ古墳，寺うしろ山古墳の３基がある。浅間山古墳は前方後円墳のようであるが，いずれも未調査のため詳しいことは分からない。

台地上に比べて，低地面にある遺跡には，先に述べた葦間山古墳などが見られるが，決して

多くはない。古墳では，小貝川の西岸，五行川とに挟まれた下館市島地区に島古墳がある。径60ｍの円墳ということであるが詳細はわからない（下館市史編纂委員会　1968)。遺跡では小貝川左岸の明野町吉田地区に，古墳時代から奈良平安時代の遺物を出土する吉田金井遺跡がある。古墳時代関係では中期以降の遺物が見られるようである。前期を中心としたものには，今回報告する下館市鎌田遺跡がある。下館市街地の南方で，五行川の右岸にあたる。まとまった量の土師器が出土しているが，発掘調査による出土ではないため遺構などの状況は不明である。

小貝川流域の古墳の分布を見ると，前方後円墳が集中する村田古墳群のある左岸台地上の優勢が窺われる。右岸では，注目すべき古墳や遺跡は数少ない。確かに詳細な分布調査が行われた左岸に比べて右岸地域では調査が十分行われているとはいえないが，古墳については極めて少ないことを考慮にいれる必要はあるだろう。低地上の遺跡は，遺跡としては確認しにくいため数少ないが，今のところ弥生時代以前の遺跡は見つかっておらず，人々が生活の場を低地に広げたのはを古墳時代以降と考えられる。

ｂ．桜川流域（第２図）

桜川右岸の遺跡には，桜川低地に直接面する台地上にある遺跡と，桜川に合流する観音川などの支流ぞいの台地にある遺跡がある。明野町では北から駒込・宮山・倉持・東石田の諸古墳群（明野町史編さん委員会　1985)，つくば市に入って，菅間大塚山古墳が存在している。

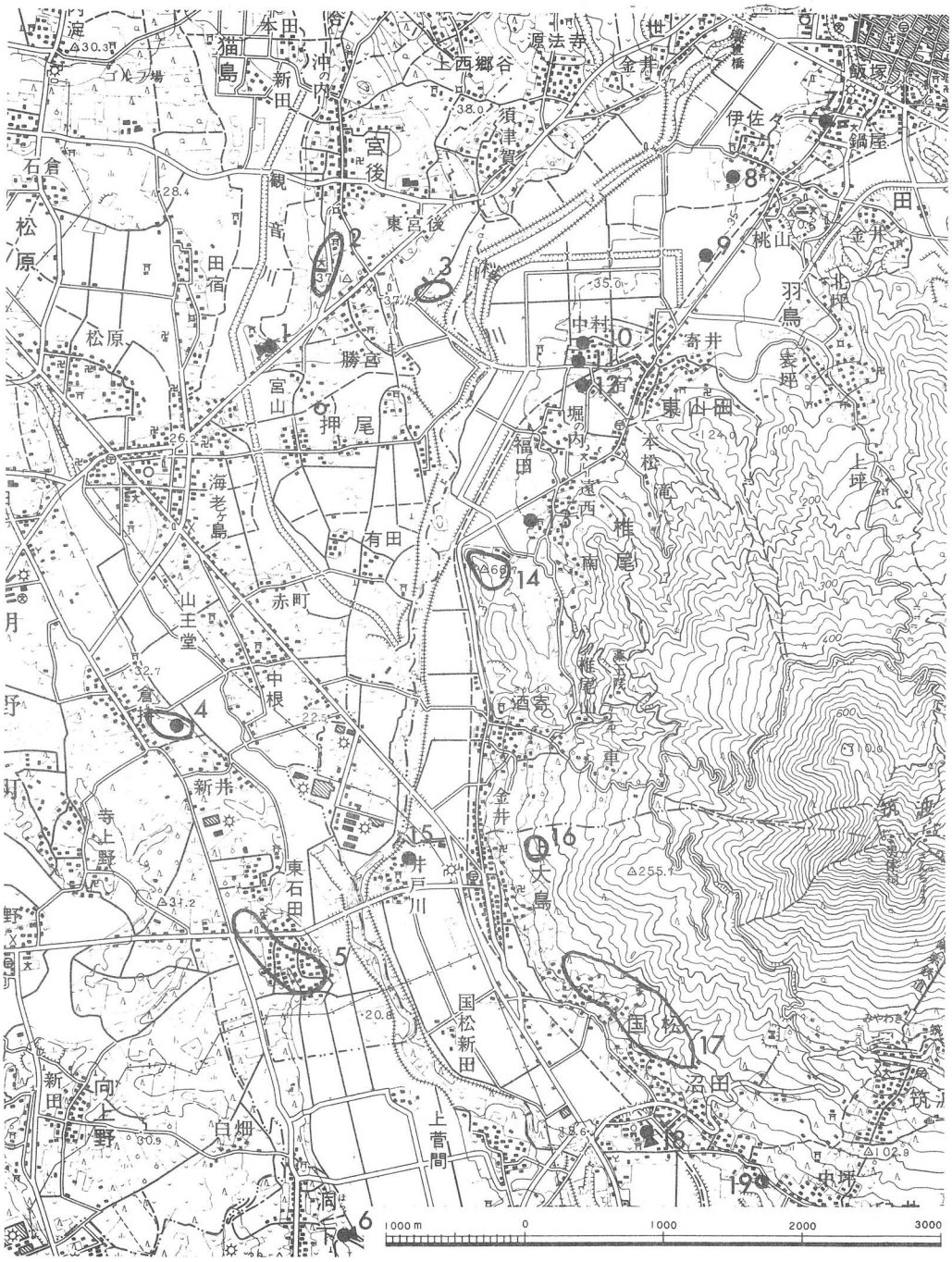
駒込古墳群(3)は，桜川と支流の小河川とに挟まれた細長い舌状台地の南端に位置する。径10ｍ前後の円墳４基があったらしいが，現存するのは２基で主体部，埋葬施設などは不明である。

宮山古墳群(2)は，観音川が桜川に合流する地点から約3.0ｋｍ上流の左岸の台地上に存在する。宮山観音古墳は(1)，川に向かって半島状に突き出した台地の先端部に位置する大型の前方後円墳で，今回測量調査を行った。その北方のやや離れた台地の縁辺には，径10ｍ前後の円墳５基が現存している。埋葬施設，副葬品等は明らかでない。周辺の台地上には前期の土器がみられる宮山遺跡，弥生後期から古墳時代にわたる天神遺跡などの遺物散布地が存在している。

倉持１号墳(4)は，やはり桜川の支流の流れる低地に臨む台地縁辺上に位置する。1981年と1982年の倉持遺跡の調査の際，周湟が発見されて明らかになった古墳で，墳丘と内部主体は失われていた。径約20ｍの円墳で，周湟内から刀子と土師器が出土しており，５世紀に位置付けられている。倉持遺跡からは古墳時代の方形周溝墓が３基検出されている（明野町教育委員会　1983)。

東石田古墳群(5)には，桜川低地に臨む台地上に立地する５基の円墳，あるいは前方後円墳があったらしい。今は消滅した古墳の内１基から出土したという勾玉，小玉，耳環が残っている。なお，現在は墳丘は残っているもののかなり崩れており，径10ｍ前後の円墳と推定されるもの，箱式石棺が露出しているものの２基が確認される。

菅間大塚山古墳(6)は，つくば市（旧筑波町）洞下の台地縁辺部に築造されている。全長30



第２図　遺跡周辺の地形と古墳時代の遺跡分布（２）

1.宮山観音古墳　2.宮山古墳群　3.駒込古墳群　4.倉持遺跡　5.東石田古墳群　6.菅間大塚山古墳　7.おふじ権現塚古墳　8.吾妻塚古墳　9.平塚古墳　10.北椎尾天神塚古墳　11.仙原塚古墳　12.北原古墳　13.大柳古墳　14.松石古墳群　15.井戸川古墳群　16.前峰古墳群　17.国松古墳群　18.八幡塚古墳　19.燧ヶ池古墳群

mの前方後円墳である。測量調査が行われているが，内部主体や遺物については明らかでない（小瀬　1981)。

桜川左岸の筑波山麓の台地上にも比較的多くの古墳が見られる。真壁町の南部には，おふじ権現塚古墳(7)，仙原塚古墳(11)，北原古墳(12)という3基の前方後円墳をはじめとして，10基以上の古墳が確認されている（川上ほか　1974）が，内容の知られているものは少ない。

唯一，豊富な副葬品が知られている例として，1988年に発掘調査が行われた北椎尾天神塚古墳(10)がある。径37mの円墳あるいは帆立貝式古墳で，埴輪があり，2つの主体部から，剣，鉄鏃，玉類，石製模造品，三角板革綴衝角付冑を含む甲冑類が出土しているという[2)]。正式な報告書がまだ刊行されていないため詳細はわからないが，5世紀前半に位置付けられると言えるだろう。

他に出土遺物が知られているものとしては，玉類，耳環，圭頭柄頭などの遺物が東京国立博物館に所蔵されている東山田地区の三王塚古墳（村井　1974)，東京大学理学部人類学教室に人物，馬など形象埴輪が所蔵されている田地区の松木内古墳がある（大塚　1974）が，これらの墳丘は現在では失われている。

つくば市（旧筑波町）に入ると，前峰古墳群(16)，国松古墳群(17)などが存在している（岩崎　1981)。前峰古墳群は，東石田古墳群のちょうど対岸に当たる上大島地区にあり，円墳80基弱からなる大規模な古墳群だったと伝えられる。国松古墳群はその南に位置するが，ここの一古墳から出土したという，鈴杏葉，鏡，刀，埴輪などが東京国立博物館に所蔵されている（村井　1974)。

沼田地区所在の八幡塚古墳(18)（茂木ほか　1979）は全長94mの前方後円墳で，整備のための発掘調査により，後円部3段，前方部2段の墳丘構造が明らかになっている。埴輪が出土しており，6世紀前葉の築造とされている。

桜川流域の状況を見ると，明野町域である右岸では，前期の方形周溝墓が確認されているのは特筆すべきことだが，古墳では宮山観音古墳のほかに大型の前方後円墳は見られず，他は小規模な円墳がみられるだけである。それに対して桜川を挟んだ，真壁町・旧筑波町では多くの古墳が存在しているようである。

私たちの調査は，このように川筋単位でまとまりをもつと想定できる前方後円墳から，国家形成期のこの地方の政治動向把握を試みようとするものである。この狙いにもとづき，最大でかつ特異な占地をする葦間山古墳，これと関わると思われる台畑古墳の両前方後円墳，それに観音川筋の主墳宮山観音古墳の測量調査を行うことにした。　（三木ますみ）

註

1）『下館市史』（下館市史編纂委員会　1968）によった。『茨城県資料』（大塚　1974）では芦間山古墳，『茨城県遺跡地図』では徳持古墳とされている。

2）1988年6月19日付の『常陽新聞』『茨城新聞』の記事による。

2．葦間山古墳

（1）立地と現状（図版1）

葦間山古墳は，下館市徳持317番地に所在する。下館の市街地から東南へ2.5kmほど離れた，明野町との境界に近い小貝川沖積低地の中にあり，五行川が小貝川に合流する地点からやや上流の左岸に位置する。川に平行して続く台地の縁からは，約500m離れており，現在の小貝川の流路に近接した，ほとんど起伏のない平坦地に立地する。

古墳は現在，徳持の集落内に位置しており，周囲は，宅地，ゲートボール場，畑地などに利用されている。そのために，墳丘はかなり変形を受けることとなった。大きなところでは前方部の半分以上が削平されて宅地とされているほか，後円部の南側の裾部も，道路及び宅地のために削り取られている。墳丘上は，くびれ部から前方部の残された部分にかけてが，畑として利用されており，このための変形が窺われる。前方部南側は急傾斜しており，ここも裾部を通る道路のために，削られている可能性が高い。後円部は，全体が杉木立に覆われており，墳頂には稲荷社が祀られている。これにともなって，南側の裾に鳥居が建てられ，墳頂部まで参道が通じている。

（2）墳丘（第3図）

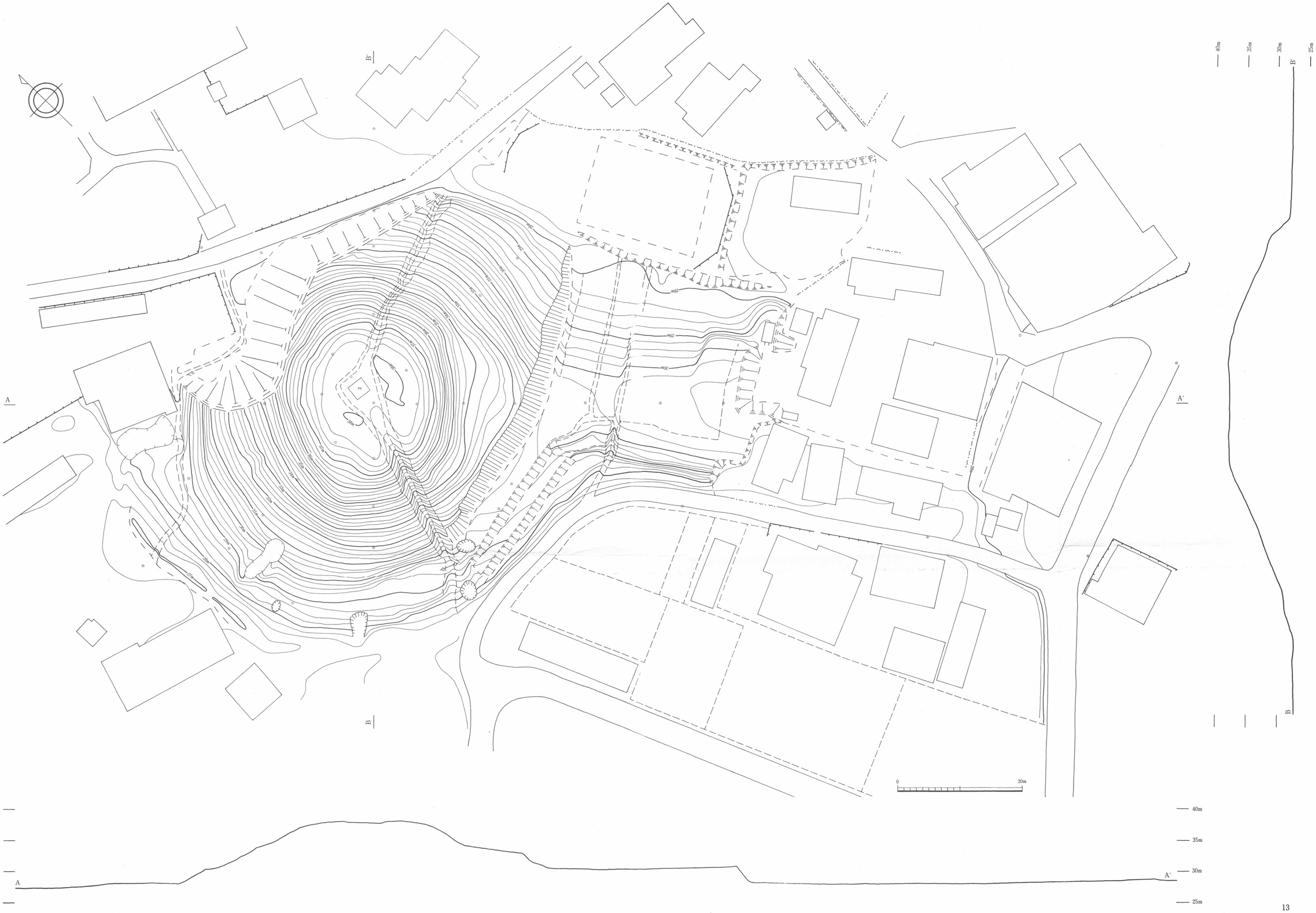
測量調査の結果は第3図に示す通りである。前方部を南東に向けた前方後円墳と考えられる。

後円部は，墳丘北側の裾部が，長さ約60mにわたって削り取られていたが，西側の裾は旧状を留めているようで，標高27.0m～27.50m付近に傾斜変換線が弧状にめぐるのが認められた。北よりの部分は宅地との境界で浅い溝となっているが，この線を墳丘の裾と考えてよいと思われる。後円部東側の削られていない部分では，標高27.50m付近に傾斜変換線が認められる。北側の上り口となっている部分が若干変形しているものの，裾部として問題はないだろう。

後円部墳丘斜面では，参道や西側斜面の数ヶ所の窪地のほか，後円部の南東，前方部側の斜面の中腹の，幅8mほどの傾斜の緩慢な所も，後世の改変によるものと思われるが，それ以外の部分では目立った改変は見受けられないようである。斜面には，部分的に傾斜の平坦化する所が何ケ所か認められたが，はっきりとした段築面としてこれを把握することはできなかった。また葺石と思われるものは見られなかった。

墳頂部は標高37.50m付近から平坦化が始まり，参道で一部が削られてはいるが，径16～18mの円形の平坦面を形成している。この平坦面のほぼ中央に稲荷社が建てられていて，建物の周囲がいくぶん低く整地されているため，墳頂部最高点はその外側にあって，標高38.042mを測る。裾部からの比高は約10.5mとなる。墳頂平坦面の中心を通して，西側と東側で押さえられた裾部を結んで測ると，後円部径は82mとなる。

くびれ部は，後円部と前方部の境が長さ50mに渡って削られて，高いところで比高約2mを測る崖ができており旧状を窺うことが難しい。この崖は後円部南側斜面まで続き，テラス状の平坦面を形成している。この下もさらに2段に渡って削られ階段状の茶畑となっている。北



第３図　芦間山古墳墳丘測量図

東側では，後円部と前方部の境が，傾斜に合わせて若干削られているだけなので，南側に比べて変化は少ない。

前方部は鞍部の崖の下から30ｍ前後のところから先は完全に削平されて宅地となってしまっている。墳丘上は頂部から南東側斜面が畑となっていて，その区画ごとに人為的な平坦面が作り出されている。南東側斜面はくびれ部近くでは緩やかに傾斜している。墳丘の下は，ゲートボール場のためにやや削られているが，そこより上の標高28.0ｍ付近から傾斜が変わっており，後円部の裾部の位置から考えても，この辺りを裾部としてよいと思われる。前方部現存部の先端近くでは，頂部の平坦面が広く張り出している。裾部の線は広がりが見られないため，斜面は急傾斜している。斜面の状況からして，くびれ部の斜面が旧状に近く，先端近くの頂部平坦面は，土を斜面の上に盛って造成したものと考えられる。前方部の南西側斜面は藪となっているが，標高29.50ｍから下が急傾斜しており，削られたものと思われる。その下には道路が通るが，標高は27.25～27.50ｍと後円部の裾部の標高と変化はない。

前方部の高さは，残存部分のほぼ中央が30.93ｍで最も高く，後円部との比高は7.808ｍ，裾部との比高は約３ｍである。鞍部の最も低い部分の高さは30.234ｍを測る。後円部との間に崖が存在することから，削平されていることも考えられ，本来，現状より高かったとも考えられる。『茨城県史料』では，前方部の高さは後円部より約２ｍ低いとされている（大塚1974）。しかし，北東側斜面を旧状に近いものとして，前方部幅を考えた場合，墳頂部の平坦面の幅がこれ以上極端に狭くなるとは考えられず，高さが残存部分において，現状を大きく上回ることは考えにくい。したがって，削られた部分の高さが，さらに高くなることを想定したとしても，後円部との比高はかなり大きいものと思われる。

古墳築造当時の前方部の長さがどれほどであったかが問題となるが，測量調査では，前方部前端を示すような地形上の痕跡は，まったく認められなかった。ただ地割としては，残存部分の最端から40ｍ離れたところにある古い道の跡があることがわかった。前方部南西側の裾を通る道路に直交するもので，これに面して地蔵堂が建てられているが，現在ではほとんど使用されていない。この道が墳丘の裾部を通っていたという確証があるわけではないが，前方部前端の位置の目安のひとつとして考えておきたい。

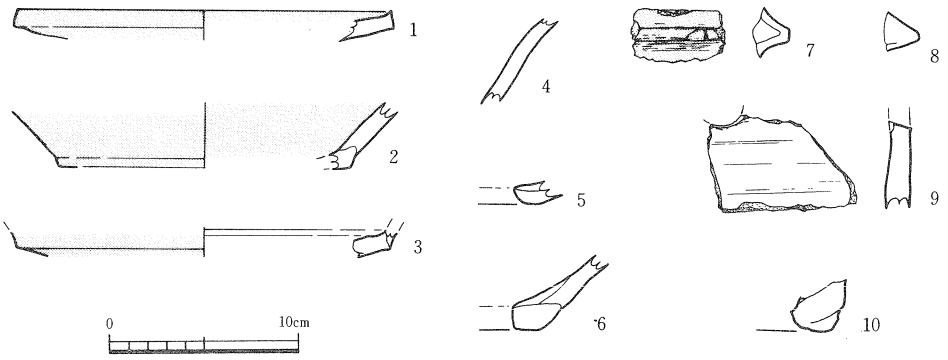
以上のようなことから，本古墳は後円部については後円部径82ｍ，後円部高10.5ｍという復原結果がでる。主軸はおよそN43°Wの方向である。前方部については，先に述べた旧道に前端部を置いた場合，全長141ｍとなる。前方部幅については，復原は難しいが，残存部分の形状から推して，後円部径をかなり下回るものになると思われる。

（３）遺物

調査中，主として前方部上の畑から，10片余りの埴輪と思われる破片を表面採集した。いずれも小片であるが，部位のわかるものについて図示した。

埴輪（第４図１～10，図版１-２）１～６はその形状から壺形埴輪の破片と推定される。

１～４は口縁部あるいは頸部の破片で，厚さ0.8～0.9㎝である。１は口縁端部がわずかで，



第４図　芦間山古墳表面採集遺物実測図

残存するのは全周の10％程度に過ぎないが，口径は20㎝前後になるものと推定される。大きく外傾するものと思われ，口唇部は明瞭な面を成している。内外面，端部ともにヨコナデが施されており，赤色塗彩が認められる。色調は明黄褐色を呈する。２は口縁端部を欠くが，有段口縁の段部が残る。頸部の端を面として整えた後，その上に外傾させた口縁部を置いて接合している。内外面ともに横方向のナデが施されており，赤色塗彩が認められる。色調は橙色を呈する。３は段部のみが残る。頸部の内外面と端部をヨコナデで整えた後に，口縁部を接合している。外面に赤色塗彩が認められる。色調は明黄褐色を呈する。４は口縁部と思われ，外彎気味に開く。内面横方向，外面斜め方向のナデが施され，赤色塗彩が認められる。色調は明橙色を呈する。

５・６は底部で，焼成前底部穿孔が行われている。径の復原はできなかった。５は小片で，薄手である。赤色塗彩は認められず，色調は橙色を呈する。６は底の部分がやや肥厚しているが，胴部にかけて薄手になり，いくぶん内彎気味に立ち上がっている。内外面にナデが施され，赤色塗彩が認められる。色調は橙色を呈する。

７～10は，器形を特定することができなかった。

７・８は突帯が剥離したものである。７は断面台形を呈する。高さを持つが，接合面がふくらみを持っており，屈曲面に付く可能性が高いと思われる。外面にヨコナデが施され，赤色塗彩が認められる。色調はにぶい橙色を呈する。８は断面三角形で接合面は平坦である。外面にはヨコナデが施され，赤色塗彩が認められる。色調は橙色を呈する。30㎝前後の径が推定されるものである。

９は透孔を有する破片である。厚さ１～1.4㎝で，円筒状に復原され，径は20㎝前後になるかと思われる。透孔は，弧状の部分がわずかに残るだけだが，円形とすれば径２㎝前後の小さめのものとなる。

10は底部である。底面がいくぶん丸みを持っており，小片のため明確ではないが，ほぼ直立するようで，壺形埴輪の底部とは考えにくい。内外面，および端部にナデが施されている。色

調は橙色を呈する。

以上の埴輪片の胎土は，1～9についてはほぼ共通したもので，石英を中心とした砂礫を多量に含んでいる。10だけが異なっており，長石などの小礫とともに金雲母を多く含んでいる。これと同じ胎土のものは，図示したもの以外でも1点だけであった。

(4)まとめ

本古墳の年代について若干の検討を行いたい。

まず墳形は，改変が著しく復原が難しいが，後円部に比べて前方部の高さが低く，前方部の幅が後円部径をかなり下回るものであることは推定が可能である。こうしたことから本古墳は古式の墳形を呈するといえる。

墳丘から採集された埴輪は点数が少なく，しかも小さい破片であるため，その全形を窺うことが困難であるが，壺形埴輪が存在したことは確実と思われる。円筒埴輪が存在した可能性も考えられるが，明確な特徴を示すものがないため，ここでは壺形埴輪を検討の対象としたい。

周辺地域で壺形埴輪を出土している古墳としては，岩井市上出島2号墳（大森ほか　1975）が挙げられる。全長56ｍの前方後円墳で，主体部の粘土槨からは滑石製の勾玉，管玉，鉄剣，鉄鏃，鉄斧，鉄針が出土しており，年代的には5世紀の前葉に位置付けられる。墳丘から出土した壺形埴輪は，極めて長胴で口縁の段の部分が粘土帯貼り付けによって形成されており，壺形埴輪としては後出的な形状を呈している。

上出島2号墳の壺形埴輪と比較してみると，葦間山の壺形埴輪は，底部の破片の状況からして，胴部はふくらみを持った，球形に近いものであることが窺われる。また，頸部と口縁部の境は，明確に段を形成している。こうしたことから芦間山古墳の壺形埴輪は，上出島2号墳のものよりも古く位置付けられると思われる。

茨城県内では，大洗町鏡塚古墳（大場・佐野　1956），常陸太田市梵天山古墳（塩谷　1985）でも壺形埴輪が出土したとされているが，詳細はわかっていない。他に比較資料となるものとしては，有段口縁の焼成前底部穿孔の壺形土器を出土している古墳が，いくつか見られる。県南地域では，岩瀬町狐塚古墳（西宮　1969），八郷町佐自塚古墳（斎藤　1974），桜川村原1号墳（茂木ほか　1976），玉造町勅使塚古墳（大塚・小林　1964ａ）などがある。勅使塚古墳のものは，胴部がいくぶん長く口縁も後出的だが，他のものは細部には違いがみられるものの，いずれも球形の胴部で，明瞭な段をなすものが多く，4世紀末から5世紀初頭に位置付けられる。細部の比較は困難だが，葦間山古墳の壺形埴輪は，概してこれらのものに近い形状を持っているといってよいと思われる。

円筒埴輪が存在する可能性もあり，十分な検討とはいえないが，現段階では，以上のようなことから，葦間山古墳には4世紀末から5世紀初頭の年代を考えておきたい。（三木ますみ）

3．台畑古墳

（1）立地と現状（図版2）

台畑古墳は明野町大字村田字台畑1316～1318番地に所在する。明野町の北西部，下館市との境界に近い，小貝川左岸の台地上に位置する。この辺りの台地面の沖積低地面との比高は10～15ｍで，急斜面を持って低地面に臨んでいるが，古墳はその縁辺部に立地している。墳丘築造面は北西に向かって緩やかに傾斜しているが，北東側では段差がみられる。

現在，台地面である墳丘の東側は，畑地として利用されいるが，墳丘および，その西側の低地へと降りる斜面は山林となっている。墳丘の西側には，墳丘に沿うように南北に道路が通っており，北へ行くにつれて次第に深い切り通しを形成しつつ，台地の下へ下っている。そのために墳丘も一部を削られている。後円部墳頂部には，富士講の石碑が立てられている。石碑の正面に通じる道が墳丘西側に認められるが，墳丘中腹からの土取りによって消滅している。参道としては前方部へ通じる斜面が現在使われているようである。前方部前端側は裾が削られ，整地されている。

（2）墳丘（第5図）

測量調査の結果は，第5図の通りである。前方部を南東に向けた前方後円墳と考えられる。

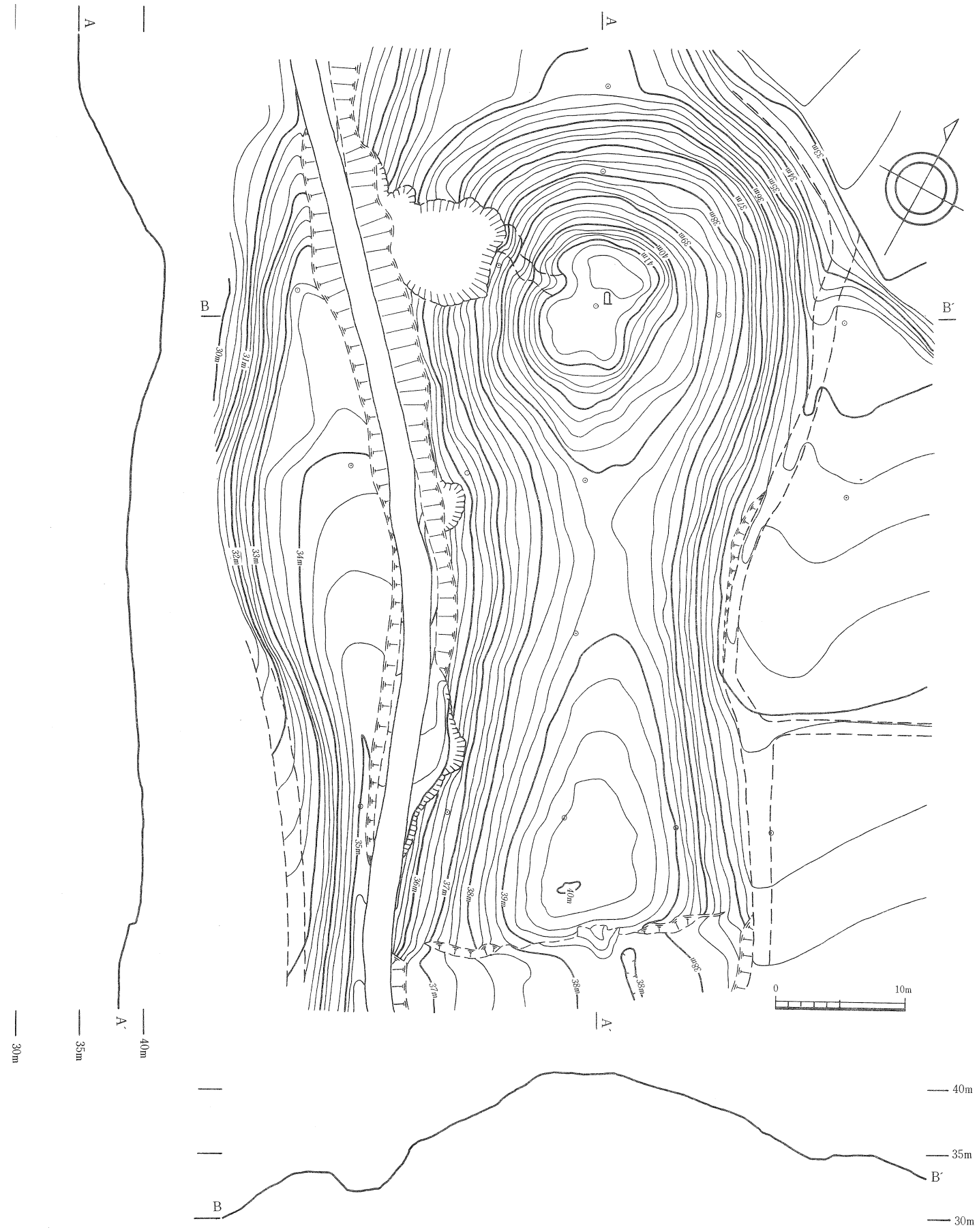
後円部の西側斜面のほぼ円形の大きな土取りや，裾部が墳丘西側と前方部前端で削られていることなどの改変があるが，墳丘そのものは概ね残存している。

後円部墳頂部は，標高41ｍ付近から平坦化し，長径10ｍ，短径6ｍの楕円形の平坦面が形成されている。最高点はその北よりにあり，41.64ｍを測る。ただし，平坦面の広さ，形状，平坦面の下の傾斜が急な点などは，いくぶん不自然で，この後円部墳丘が，近世以降，富士山信仰に利用されていることなどを考えると改変されている可能性もあり，本来の墳頂部にさらに盛土されたということも考えられる。それ以外の後円部斜面の等高線は，北半部では，ほぼ同心円状に巡りそれほど大きく本来の墳形を損ねてはいないようである。

後円部北側には標高34.75～35.25ｍ付近で明瞭な傾斜変換線が認められる。この線は西側に来ると，急斜面にかかり，裾部を押さえることが難しくなる。さらには，切り通しの崖面にぶつかり，くびれ部付近まで墳丘裾部は，失われているようである。切り通しは台地を深く削っており，その西側には，平坦面が細長く残されている。ここに墳丘の痕跡は見られないので，墳丘裾部はここまでは及んでいないと考えられる。後円部東側の畑地には，比高1.5ｍの段差がつくられており，北側が低くなっている。後円部北西側の墳丘斜面はこの段の斜面にかかる形となり，裾部はここではわかりにくくなってしまっている。

くびれ部は，東側では裾がおよそ押さえられるが，後円部から緩やかな曲線を描いており，明瞭なものではなくなっている。これは斜面で見ても同様である。

前方部は，前端が削られているほかは，墳丘斜面および，頂部付近はよく旧状を留めていると思われる。裾部は西側が切り通しにかかっており位置を押さえにくいが，東側では，くびれ



第５図　台畑古墳墳丘測量図

部から続いてほぼ押さえることができる。前端部は標高39.25 m付近から下が直線的に削られている。しかし，それより上部の稜線は両側とも押さえることができるので，前方部前端の位置を推定することができる。崖下の平坦面は，墳丘東側の畑の面よりも70～80 cmほど高くなっている。墳丘を削り取っただけではなく，盛土による造成も行われていると思われる。前方部の上面は前端側に幅8 mほどの平坦面を持ち，最高点は中軸より西へ寄ったところに標高40.01 mを測る。西側裾部からの比高差は3.5～4.5 m，後円部墳頂との比高差は約1.5 mとなる。そこから緩やかに傾斜して行き，標高38.869 mを測る鞍部を経て，後円部に接続する。

以上のようなことから，本古墳は主軸方向N28°Wの前方後円墳で，墳丘規模の復原を行ってみると，全長72 m，後円部径36 m，前方部長36 m，前方部幅28 mとなり，高さは後円部が約6.5 m，前方部が3.5～4.5 mとなる。段築の痕跡は窺えなかった。また葺石らしいものも認められなかった。

（3）まとめ

台畑古墳からはこれまで知られた出土遺物がなく，今回の調査においても墳丘から埴輪等はまったく採集することができなかった。このため年代を押さえるためには今のところ墳丘形態を手がかりにするほかはない。

墳丘の復原を，上田宏範による方法（上田　1969ほか）で行うと，台畑古墳は後円部径，前方部後長，前方部前長の比率が6：4.3：2となる。茨城県下の前方後円墳の築造企画についての上田の検討（上田　1985）によると，台畑古墳と近い，6：4：2の比率を示すものに鹿島町宮中野古墳群中の夫婦塚古墳があるが，前期型であるA型式に分類されている。A型式は前方部前長が後円部半径を下回るものとされており，他に鏡塚古墳，佐自塚古墳，三昧塚古墳などが挙げられているが，これらと比べて台畑古墳や夫婦塚古墳は前方部がかなり長いことが特徴である。夫婦塚古墳には時期の手がかりがないが，これが後出的要素であることは間違いないだろう。前期型とされるA型式であるが，茨城県内では新しい時期まで見られる。しかし，三昧塚古墳などを下限として6世紀代には見られなくなっていくようである。

台地上に近接する灯火山古墳は，破壊された後に行われた確認調査の結果，埋葬部分は発見できなかったが，全長約70 m，後円部径約46 m，高さ約8 m，前方部幅約22 m，高さ約2.5 mと報告されている（瀬谷　1990）。これによると後円部に対する前方部の幅と高さの比率は台畑古墳を下回り，台畑古墳より古い様相を示している。また，前方部から壺形土器の破片が表面採集されており，これがこの古墳に伴うものであれば，葦間山古墳よりも古くなる可能性が生じる。低地上に位置するその葦間山古墳は，壺形埴輪から4世紀末から5世紀初頭と考えられる。そして墳形の比較は難しいが，台畑古墳よりも古い様相である。

以上のことから台畑古墳は灯火山，葦間山古墳に後出することは確実と思われる。前方部後長と後円部径がほぼ等しいということが，6：3：3の比率を示す上田B'型式の影響と考え，さらに県内でのA型式の下限時期を考慮したうえで，5世紀後半という年代を考えておきたい。

（三木ますみ）

4．鎌田遺跡

（1）立地と現状

鎌田遺跡は下館市二木成字鎌田に所在する。北から細長い舌状に伸びる五行川右岸台地は下館市街地の大町付近が先端となり，その先は五行川と大谷川とに挟まれた沖積低地となっている。遺跡はこの両河川ほぼ中間に位置する。五行川は1㎞ほど下流で小貝川に合流するので，大きく見れば小貝川の右岸ということになる。

遺跡はこれまでまったく知られていなかったが，1980年2月に，基盤整備事業に伴って，多量の土器が出土したことによって発見された。場所は下館市立南中学校の東200ｍの地点で，付近は標高28ｍ前後の平地で現在水田となっている。正確な出土地点，遺構，遺物の出土状況などは，その時点で調査が行われていないために明らかではない。今回，下館市教育委員会に所蔵されていたその遺物の整理を行った。

（2）遺物（第6～7図，図面3・4）

所蔵されていた土器片は，ほとんどが土師器片で，復原作業を行った結果，壺，坩，甕，高坏，器台などの器種が認められた。主なものを図示し，説明する。

壺形土器（第6図1～9，図版3）　1～7は口縁部の破片である。1は全周の10％が残存する。端部がかなり磨滅しているが，口径は16㎝前後と推定される。折り返しによる複合口縁を形成しており，ほぼ直立する幅1.5㎝の口縁外面に，横方向のやや粗いハケ目を施した後，4本一単位の棒状浮文が付けられる。残っているのは一単位のみで部分的に剝がれているところもある。浮文の断面は三角形に近いがきちんと整ってはおらず，刻み等の加飾もない。頸部外面が縦方向のハケの後ナデが施され，口縁外面は横方向のハケを施した後に，棒状浮文が張り付けられている。内面はヨコナデで仕上げられている。胎土は小礫をわずかに含むがかなり緻密で，色調は外面が橙色，内面がにぶい褐色を呈する。

2は25％が残存する。復原すると口径16㎝になる。頸部から直線的に開く。粘土の張り合わせによる複合口縁を形づくり，平坦な端部に凹線が一条巡る。外面は，頸部に横方向のミガキが認められるほかは，ハケの後に部分的に横方向のナデが施され，口縁端部にはヨコナデ痕を留める。内面はハケの後に，縦方向のミガキがまばらに入る。頸部，口縁端部，内面にに赤色塗彩が認められる。胎土は石英粒子を若干含むが，比較的緻密。焼成は良好で，色調はにぶい黄橙色を呈する。

3は15％が残存する。口径は16㎝前後と推定される。わずかに内彎気味に外傾する長い口縁である。端部は丸くおさめる。外面はハケの後，下半部を中心に幅の広い雑なミガキを縦方向に施し，上部には所々指で押さえながら施した粗雑なナデが施されている。内面は板状の工具によるナデが施されている。壺形土器としては調整に雑な点が見られるため，これ以外の器種の可能性も考えられる。胎土は1㎜大の砂礫を多く含み，粗質。色調はにぶい褐色を呈する。

4は頸部から口縁部にかけての70％が残存する。口径は10.0㎝を測る。頸部が屈曲し，直線的に開く。口縁端部はやや尖り気味である。口唇部内外面に帯状に赤色塗彩が認められる。外面はハケの後ミガキが施され，頸部には，綾杉状の刻みがわずかながら認められる。内面のうち，口縁部はハケの後ミガキ，胴部はナデで仕上げてある。胎土は1～2㎜大の石英および白色粒子を含むが緻密。焼成はやや不良で，にぶい橙色を呈する。

5は頸部から口縁部にかけてが25％残存するが，口唇部を欠く。口径は16㎝前後と推定される。頸部は屈曲し口縁は外彎気味に開く。外面は縦方向のハケ，内面は口縁部に横方向のハケ，胴部にナデが施される。口縁端部にはヨコナデ痕がみられる。胎土は1～2㎜大の砂粒を若干含むが緻密。外面がにぶい橙色，内面が橙色を呈する。

6は小型の壺の口縁部と思われる。25％残存する。口径は10㎝前後と推定される。端部近くで外彎する。外面は縦方向のハケ，内面は横方向のハケの後，端部を主にヨコナデで仕上げてある。胎土は石英を中心とした砂粒を含む。色調は外面が明赤褐色，内面がにぶい褐色を呈する。

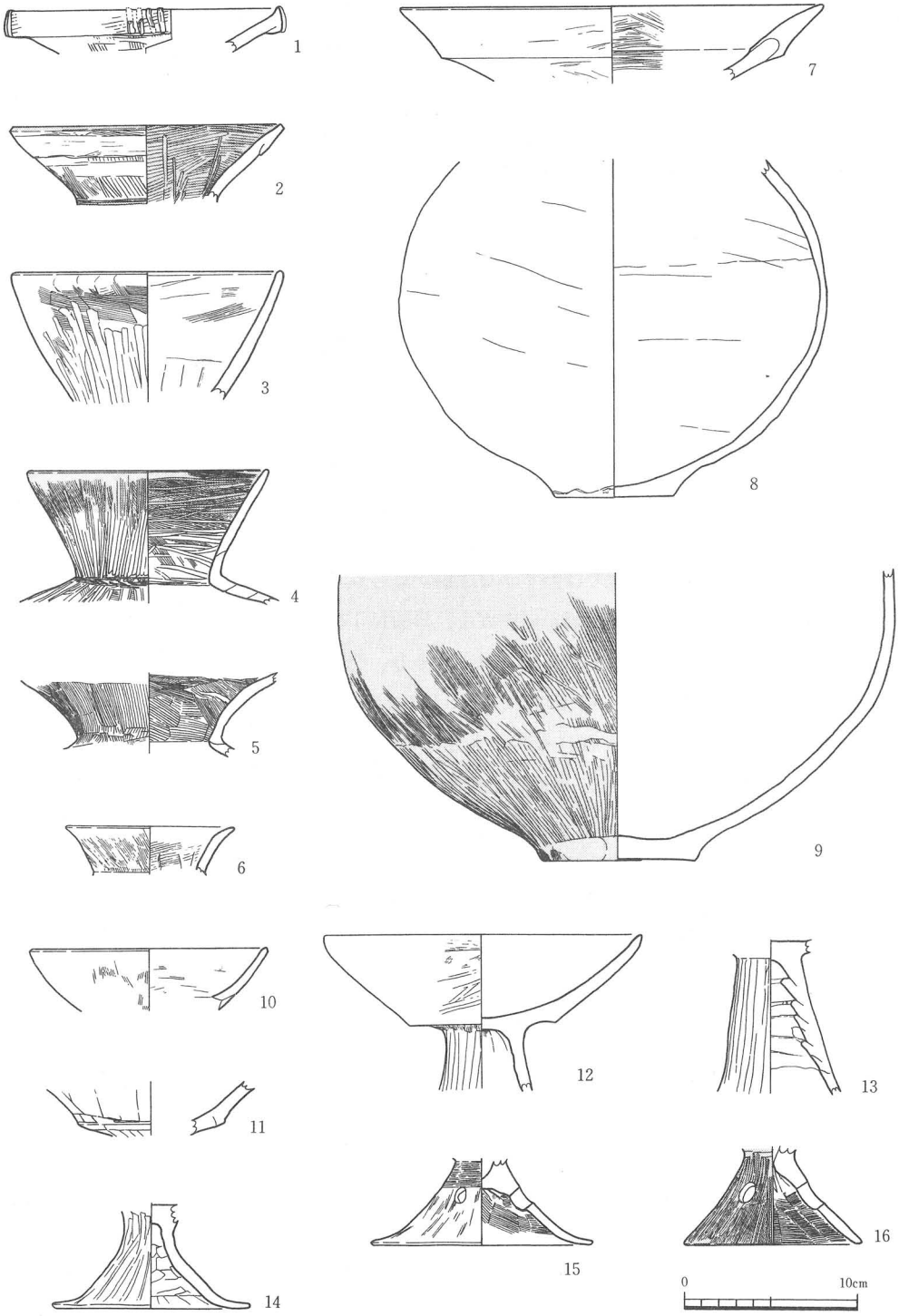
7は残存するのは10％であるが，口径25㎝前後と推定される。有段口縁ではあるが，全体的に大きく外傾しており，外面ではわずかな屈曲が見られるが，内面では小さな段を成すのみである。器面はハケの後，内面に細かいミガキ，外面に丁寧なナデが施されている。胎土は石英，雲母などの粒子を若干認めるが極めて緻密である。色調は赤色を呈する。

8は30％残存する胴部片で，底径は7.0㎝，ほぼ球形をなす胴部の最大径は25㎝に復原される。外面に横方向のナデ，内面に板状の工具による横方向のナデが施される。胎土に1～2㎜大の黄白色小礫を多く含む。焼成はやや不良で，色調は外面がにぶい橙色で，内面は黒褐色を呈する。

9は壺の胴部下半で，底部は完存するが胴部は40％が残存する。底径は9.0㎝で，胴部最大径は約33㎝に復原される。外面には縦のハケ整形の後，上部はまばらに，底部付近で密にミガキを施している。底部付近を除いて赤色塗彩が認められる。内面は横方向のナデを丁寧に施す。胎土は1㎜以下の砂粒を多量に含み，やや粗質。色調は，外面浅黄橙色，内面橙色を呈する。底部外面には黒斑が見られる。

坩形土器（第6図10）　15％残存する口縁は，口径14㎝前後と推定される。内彎しながら開き，端部は尖る。胴部との接合部分が剥離した状態で残っている。外面が縦方向のハケ，内面が横方向のハケ整形した後，両面とも，丁寧な横方向のナデを施している。胎土は緻密で，色調は橙色を呈する。

高坏形土器（第6図11～14，図版3，4）　11は口縁端部と底を欠いた坏部である。30％ほどが残存し，底径が9㎝前後と推定される。下端に稜を持ち，外彎気味に開く。器面調整は，外面が縦方向のヘラケズリ，あるいはヘラナデで，稜の下側のみ横方向にナデを施している。内面は状態が悪く，仕上げ法はまったく不明である。胎土には多量の砂粒に加え，礫も若干含む。色調はにぶい橙色を呈する。



第６図　鎌田遺跡出土土器実測図（１）

12は脚部の下部を欠く。口縁は30％残存し，口径が約19㎝に復原される。坏部は直線的に大きく開き，端部近くでわずかに内彎する。下端にはっきりした稜を持つ。脚部は現存部分でわずかに開く。坏部，脚部とも，外面はハケの後，ミガキ，坏部内面は不整方向のナデ，脚部内面はヘラケズリが施される。胎土は1㎜大の砂粒を多く含む。焼成は良好で浅黄橙色を呈する。

13～16は脚部である。13は端部を欠く。接合部から直線的にわずかに開き，下端近くで，やや外彎気味になる。外面は縦方向のヘラケズリが見られるが，内面はほとんど調整がされず，粘土紐を積み上げて成形した過程が明瞭である。胎土は砂粒を多く含む。焼成やや悪く，赤褐色を呈する。

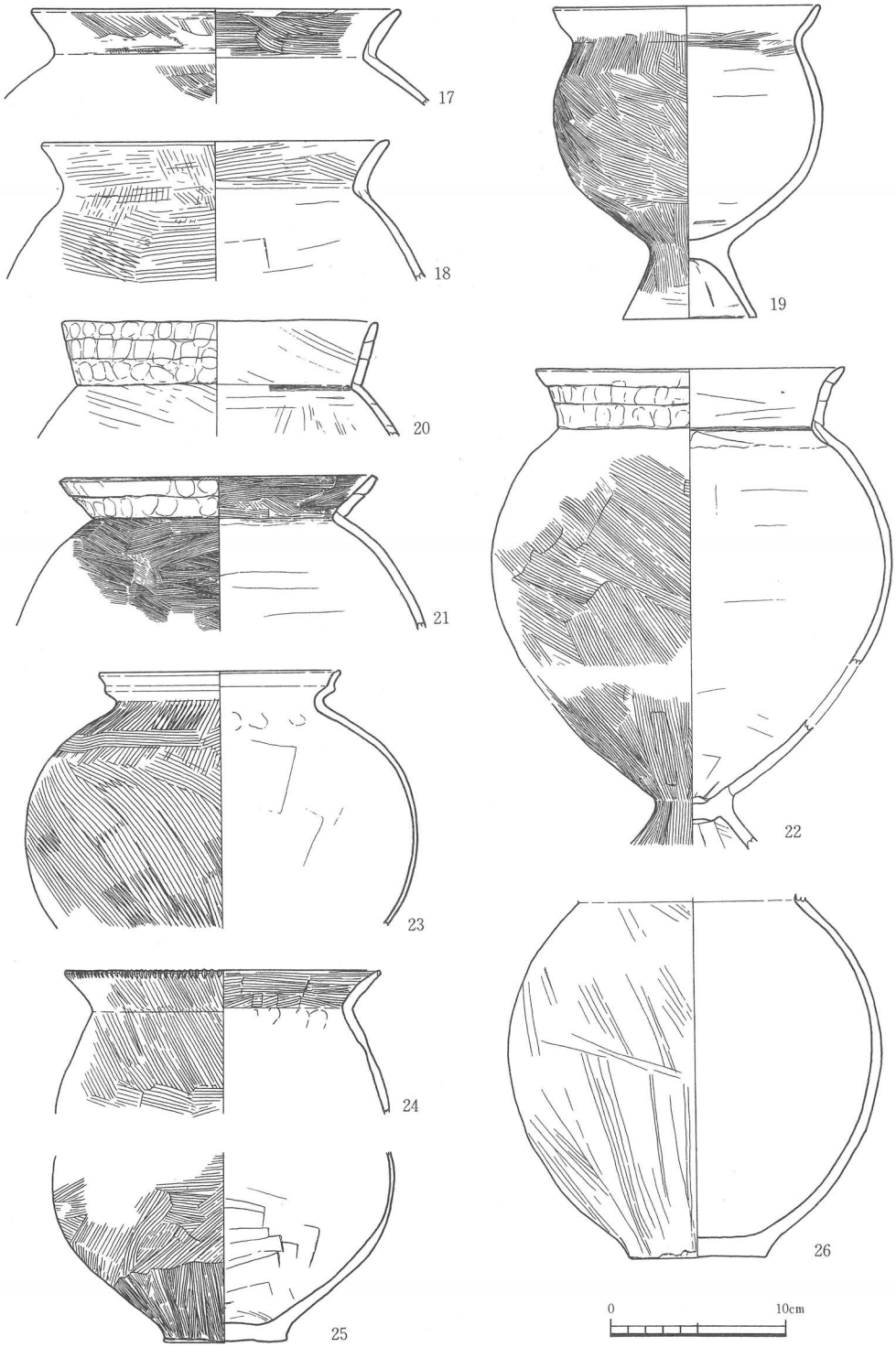
14は全体の80％が残存し脚径は11.6㎝に復原される。接合部は直立気味であるが，下部に行くに従って大きく開き，端部は水平になる。坏部内面にはミガキが認められる。脚部外面は幅広のミガキを粗く縦に施し，下半は横方向になでている。内面は横方向のケズリを行い，端部には板状工具によるヨコナデを施している。胎土は石英などの砂粒を多く含む。焼成は良好で明橙褐色を呈する。

15は基部は完周するが端部はわずかしか残らない。ハの字状に開き，端部近くで水平になる。脚径は13㎝前後と推定される。やや上位に径約1.1㎝の円孔を3ヶ所に穿つ。脚の上端には坏部を取り付けるための，ほぞ穴が残る。外面は縦方向のハケの後，横方向のナデが施され，上部にヨコナデがめぐる。内面は横方向のハケで，端部にヨコナデが施される。胎土は石英粒子を若干含み，やや粗質である。色調はにぶい橙色を呈する。

16は70％が残存し，脚径は10.4㎝を測る。ハの字状に，ほとんど直線的に開く。中位に径約1.5㎝の円孔が3つ穿たれる。接合部のほぞ穴は見られない。外面はハケの後に縦方向のミガキで，外面に赤色塗彩が認められる。内面は横方向の細かいハケが施されている。胎土は砂粒をわずかに含む。色調は浅黄橙色を呈する。

甕形土器（第7図17～26，図版3，4）　17の口縁部は10％が残存するに過ぎないが，口径は21㎝前後と推定される。頸部がくの字状に屈曲し，やや外彎気味に開き，端部は面を成す。外面は斜め方向のハケの後に，頸部に横方向のナデ，口縁端部にはヨコナデ，口縁部の内面は横方向のハケ，胴部内面は横方向のナデで器面調整が行われている。口縁部は，胴部を整えた後，その上端の粘土帯を加え接合している。胎土には長石の砂粒を含む。色調は，外面褐灰色，内面灰褐色を呈する。

18は口縁部が15％残存し，口径20㎝前後と推定される。頸部の屈曲は弱いが，内側が肥厚して鈍い稜を形成する。口縁部は直線的に開き，先がわずかに外反し，端部は丸みを持つ。肩部の張りは弱いようである。外面は，頸部の接合部に縦方向のハケを施した後，横方向のハケを施す。内面は口縁部に横方向にハケ，胴部に横方向の板状工具によるナデが施される。口縁端部の内外面はヨコナデがめぐる。頸部には，内面と外面両方で下向きの調整が認められ，口縁部は胴部を挟み込むように接合されていると思われる。胎土には，0.5～1㎜大の白色の粒



第７図　鎌田遺跡出土土器実測図（２）

子を多量に含む。焼成はやや不良で，灰褐色を呈する。外面に煤の付着が見られる。

19は台付甕で，全体の60％が残存する。口径15.5㎝，脚径7.8㎝，器高18.2㎝を測る。口縁部は直線的に開くが，外側がわずかにふくらみ，端部は丸みを持つ。頸部ははっきりした稜を持たずに曲る。胴部は，肩部の張りが少なく，下半部も丸みを帯びる。最大径はやや上位にくる。脚部は直線的で，やや短く，開き気味である。器面調整は，口縁部内外面ヨコナデ，肩部外面に縦方向，胴部中位外面に斜め方向，胴部下位から脚部上半の外面に縦方向，頸部内面に横方向のハケ，脚部下半外面にヨコナデ，胴部内面と脚部内面に板状工具によるナデが施される。胎土には，２～３mm大の長石などの小礫を多量に含んでいる。色調は，外面は明赤褐色，内面はにぶい赤褐色を呈する。

20は口縁部が20％，胴部がわずかに残存する。口径は18㎝前後と推定される。頸部の屈曲は弱く，口縁部は，直線的にわずかに外傾して，端部は尖る。口縁部は３段の粘土紐の積み上げから成り，外面に輪積み痕を明瞭に残す。ナデを施しながら粘土紐を積み上げた後に，段ごとに指頭圧痕をつけている。口縁部内面と胴部内外面には板状工具によるナデが施されている。口縁部は，胴部の器面調整を行った後につけられる。頸部の屈曲部の内面には横方向のハケが施されている。胎土には２mm大の淡黄白色の小礫を多量に含み，やや粗質である。色調はにぶい橙色を呈する。

21は口縁部は完周するが，胴部は肩部が一部残存するのみである。口径18.5㎝を測る。頸部はくの字状に屈曲し，口縁部は直線的に強く外傾し，端部にはっきりした平坦面を形成する。口縁部は２段の粘土紐の輪積みから成り，外面に輪積み痕を明瞭に残す。また，粘土紐の段ごとに指頭で押さえた圧痕が並ぶ。下段は一つ一つの痕が明瞭だが，上段は撫でながら押さえていっているようで，はっきりしない。胴部の外面，口縁部の内面，口唇部の平坦面に，細かいハケが横方向に施される。屈曲部の内面にナデがめぐり，胴部内面には板状工具による横方向のナデが施されている。胎土には石英などの砂粒を若干含む。焼成は良好でよく焼き締まっている。色調は浅黄橙色を呈する。

22は台付甕である。口縁部80％，胴部上半部30％，胴部下半から脚部の上部までが残存する。胴部は上半部と下半部が接合しなかったが，明らかに同一個体と思われるので，復原し図化した。口径は18.2㎝を測る。頸部の屈曲は弱く，口縁部はわずかに外傾し，端部近くから外彎し，先は尖り気味である。胴部は，肩部の張りは弱く，下半もやや丸味を持つが，底部は尖りぎみになる。脚部は，内面が丸くならず，底部の尖りを残している。口縁部は３段の粘土紐の輪積みから成り，外面に輪積み痕を明瞭に残す。指頭圧痕が下２段につけられるが，最上段には見られない。口縁部と胴部の内面には板状工具によるナデ施される。頸部の内面には，細かいミガキを施すことによって屈曲部分の稜が作り出されている。胴部の外面にはハケが施される。頸部近くはナデによって消されているが，上半部に斜め方向，下半部は縦方向に，いずれも下から上に施されている。ハケの単位は比較的幅広で一度に長く施される。脚部外面にも縦方向のハケが施される。脚部内面はヘラケズリで整えられている。底部内面に炭化物の付着が

認められる。胎土は，１～２㎜大の砂礫を多量に含み，やや粗質である。色調は上半部が浅黄橙色であるが，下半部は外面がにぶい褐色，内面が灰褐色を呈する。

23はいわゆるＳ字状口縁台付甕である。口縁部は90％残存するが，胴部は上半の30％が残るほかに，下半部と思われる破片があるが接合しなかった。口径は14.0㎝を測る。口縁部は，上段が外彎気味にやや開き，端部の内側に凹線がめぐる。頸部は緩く屈曲し，内面に指押さえの痕が残る。ハケ目は見られない。肩部が張り気味で，胴下半部は直線的になるようである。器壁は極めて薄い。口縁部内外面にはヨコナデが，胴部外面には，粗いが明瞭なハケが施される。肩部より下は右下がりの斜め方向に，上は左下がり斜め方向に施した後，肩部に水平に巡らせている。このハケを施す前には，斜め方向の削りが施されているようである。胴部内面には板状工具による，横方向のなでが施される。胎土には，２～３㎜大の石英の小礫を若干含む。色調は，口縁から胴部上半にかけてがにぶい黄橙色，胴部下半は灰黄褐色を呈する。

24は口縁部から胴部の一部が20％残存する。口径18㎝前後と推定される。頸部は内面に稜を持って屈曲し，口縁部は外彎気味に開く。端部は薄くなり狭い平坦面を持つが，その外面に刻み目が施される。胴部は肩部がまったく張らない形で，器壁がかなり薄い。器面調整は，外面が，口縁部から胴部の上部までが斜め方向，下部が横方向のハケ，内面が，口縁部が横方向のハケ，胴部が横方向のハケが施される。内面の屈曲部の下に指で押さえた痕が残る。胎土は石英粒子を若干含む。色調は外面が黒褐色，内面がにぶい黄橙色を呈する。

25は胴部下半である。底径が7.2㎝，胴部最大径は20㎝に復原される。器壁が胴部中位で極端に薄くなる。外面は胴部中位に斜めを基調とした不整方向のハケを施した後，下位に縦方向のハケを施しており，内面は板状工具による幅の狭いナデが施されている。外面下部に炭化物の付着が見られる。胎土は，石英の微細な粒子を多く含むほか１～２㎜大の砂礫を若干含む。色調は，外面が上部黒褐色，下部と底部が赤褐色で内面はにぶい黄橙色を呈する。24と同一個体となる可能性がある。

26は胴部が40％残存し，頸部をわずかに残して口縁部を欠く。胴部最大径が21.6㎝，底径7.8㎝に復原される。最大径を中位に持つ球形の胴部で，底部は平底である。頸部の内面に稜を成す。器面調整は，外面には，上半に斜め，下半に縦のササラ状工具によるナデを下から上へ施し，その後から中位に横方向に施している。内面は下から上へのヘラケズリの後，横方向のナデを施している。胎土には，石英と淡黄褐色の２㎜大の小礫を多量に含んでおり，粗質である。色調は，外面が暗赤褐色，内面がにぶい橙色を呈する。

（３）まとめ

採集された土器には，わずかに他の時期の破片も見られたが，ここに紹介した土器のほとんどは，五領式土器の範疇に入ると考えられる。出土状況が不明なため，どのような共伴関係にあったかわからないので，もう少し細かい年代の検討を行ってみたい。

年代的な位置を考える上で，特徴的な遺物として，まず，Ｓ字状口縁台付甕（第７図23）が挙げられる。Ｓ字状口縁台付甕について，赤塚次郎は４段階に分類し，さらに毛野，駿河地方

で見られる変化をＢ系統の変化として４段階を設定している（赤塚　1986）が，本遺跡のものは肩部に一条横位のハケが巡っていることや，口縁部のつくりなどからＢ系統で最古式のＢ-aと考えられる。ただし頸部内面のハケは消失しており，いくぶん後出するかもしれない。口縁部に輪積痕を残す甕形土器（第７図20～22）は３点出土している。この種の甕形土器の系譜は必ずしも明らかではないが，従来から南関東の弥生時代後期前半の久ケ原式の指標とされてきた。しかし，神奈川県横須賀市鴨居上の台遺跡（岡本ほか　1981）では，弥生時代後期全般を通じて見られ，客体的になるものの古墳時代初頭段階まで存在することが明らかになった。型式的変遷がたどれ，口縁端部の刻み目の消失，頸部の屈曲などの特徴が五領式の段階ととらえられている（大村・菊池　1984）。また，指頭圧痕の後，ナデが施されているものを新しく位置付ける見解（諸墨ほか　1984）もあり，本遺跡出土のものは古墳時代に入るものといえるが，これも古い様相の土器と思われる。

そのほかに，１の棒状浮文の付いた複合口縁の壺なども，五領式の中でも古く位置付けられるといえよう。しかし７の壺形土器の口縁部はかなり後出的な有段口縁の形状を示している。また13の高坏の脚部は，残存部だけみてもかなり柱状に近く，内面に積み上げ痕を残すという特徴も，五領式の新しい段階以降のものと考えられる。

以上，十分とはいえないが検討を行った結果，これらの土器群には異なった時期のものがみられる。当地域における五領期の土器の様相が必ずしも明らかではないため，明確な位置付けはできないが，少なくとも新古の２群に分類されよう。古い一群については，該期の遺物群の一端を示すものとしては，かなりまとまったものである可能性が高いと思われる。鎌田遺跡は，これらの資料から見る限り，４世紀から５世紀前葉までの継続が認められる。

本遺跡の近辺で，該期の遺跡は台地上にかなり存在するようであるが，沖積低地上では確認された例がない。弥生時代以前の遺跡も発見されておらず，低地上に人が生活しはじめたのはこの時期である可能性が高い。そこにＳ字状口縁台付甕などの東海系の土器が見られるということは，興味深いことと思われる。

Ｓ字状口縁台付甕は，県南西地域ではこれまであまり知られていなかったが，近年，断片的ではあるが出土例は増加しつつある。また小貝川の上流である栃木県芳賀地方は，栃木県でもＳ字状口縁台付甕を多く出土する地域で，これが主体的な位置を占めている，芳賀町谷近台遺跡（小森　1980）のような遺跡もみられる。小森哲男はＳ字状口縁台付甕の流入経路を，霞ヶ浦付近を経て小貝川，五行川を遡上したものと想定している（小森　1984）。本遺跡をはじめ，近年の茨城県南西地域での発見例は，これを裏付けるものともいえよう。

人々の低地への進出に，このような外来系の土器の流入が，なんらかの形で関わっていることも考えられる。当地域では，本遺跡と同じ頃に大型の葦間山古墳が低地上に築かれるが，その背景を考える上でも，示唆を与えるものとなるかもしれない。　（三木ますみ）

5．鷺島古墳

（1）立地と現状

鷺島古墳は明野町大字鷺島に所在する。小貝川の両岸には，その沖積作用によって生じた広大な低地が広がっており，本古墳はそうした低地をのぞむ小貝川左岸の台地縁辺部に立地する。台地の標高は約30ｍ，低地との比高は約９ｍである。

この古墳を含む付近一帯は鷺島遺跡として知られ，弥生土器や土師器，埴輪などの破片が散布している。古墳は２基の存在が確認されているが，いずれも墳丘を削平されている。昭和16年３月，村道の改修工事の際，そうした古墳の１基から，円筒埴輪，人物埴輪，馬形埴輪が出土した。今回，明野町所在の台畑古墳，宮山観音古墳の測量調査にともない，それらについても実測調査を行う機会を得たので，ここにその内容を報告する。

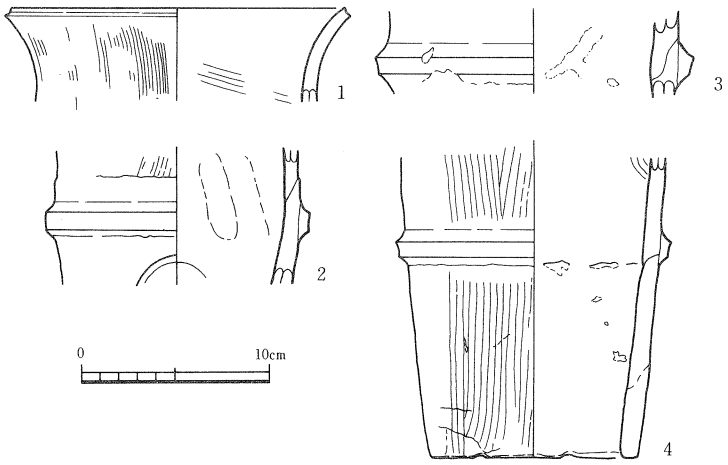
（2）遺物（第８～10図，図版５～６）

円筒埴輪（第８図，図版５）　いずれも破片で完周するものはなく，図は復原による。

１は口縁部の破片で，復原による口径は18.0cmである。端部に向かって外反し，端部は面取りが行われて中央部がくぼんでいる。外面には縦方向のハケが施され，内面には斜め方向のハケが認められる。色調は赤褐色を呈し，焼成は良好で黒斑は認められない。

２は体部の破片である。幅2.0cm，高さ0.6cm程の断面台形の突帯がめぐり，復原による突帯の部分の直径は14.2cmである。突帯の下側には，円形の透孔がわずかに認められる。外面調整は１次調整のタテハケのみで，内面の調整はナデによる。色調は赤褐色を呈し，焼成は良好で黒斑は認められない。

３も体部の破片である。幅2.2cm，高さ0.8cm程の断面台形の突帯がめぐり，復原による突帯の部分の直径は17.2cmである。外面調整は１次調整のみとみられ，内面の調整はナデによ



第８図　鷺島古墳出土円筒埴輪実測図

る。色調は黄褐色を呈し，焼成は良好で黒斑は認められない。

4は底部から第2段にかけての破片で，復原による底径は11.2cmである。底部から高さ11cm程の位置に，幅2.0cm，高さ0.6cm程の断面台形の突帯がめぐる。外面調整は1次調整のタテハケのみで，内面調整はナデによる。底部調整はみられない。色調は黄褐色を呈し，焼成は良好で黒斑は認められない。

人物埴輪（第9・10図1～6，図版5・6）　完存するものはないが，3体以上が存在する。

1は男子頭部で，現存高は14.9cmである。頭頂部から後頭部にかけてを欠失し，顔面も剝落が著しい。基本となる円筒に粘土板を貼り付けて顔面を成形しており，首の部分には縦方向のハケが認められる。顔面は顎の鋭い輪郭を呈する。左右の眉と鼻は粘土の貼り付けによるが，いずれも輪郭が不明瞭で，鼻梁もはっきりとしない。目と口は杏仁形に切りあけられ，大きさは，左右の目がともに長さ2.1cm，幅0.9cm，口が長さ3.7cm，幅1.4cmである。残存する左側頭部には上げ美豆良とみられる表現があり，これによりこの人物が男子とわかる。額から鼻，頬から首にかけてと結髪の部分には赤色塗彩が認められるが，顔面の剝落が著しいこともあり，その範囲は判然としない。色調は茶褐色を呈し，焼成は良好である。

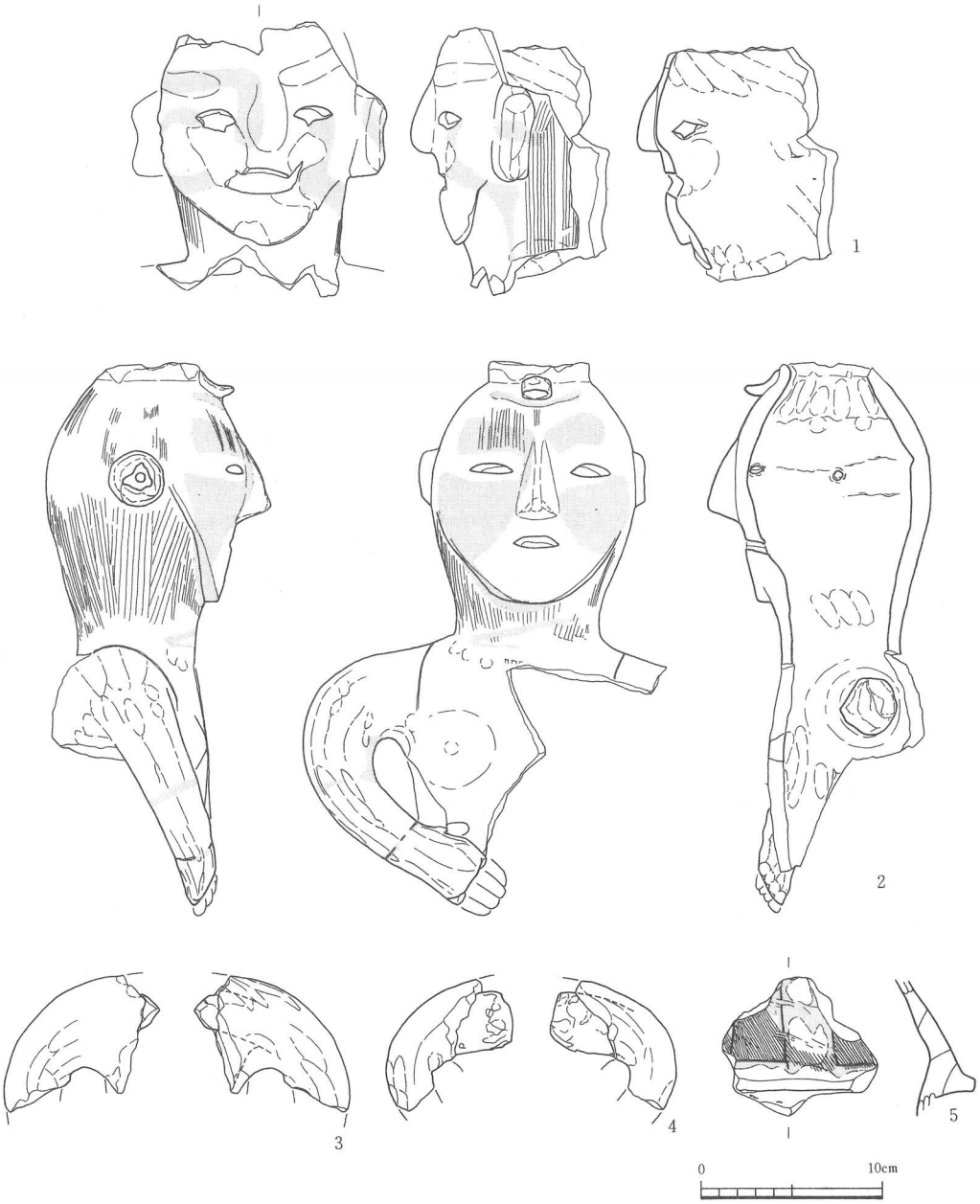
2は女子の頭部から胴部にかけてで，現存高は30.0cmである。左腕を含む胴部の大半と腰部以下および頭頂部を欠失する。頭部は円筒を基本にしてつくり，主に首から後頭部にかけて縦方向のハケが認められる。全体に丸みを帯び，現在穴のあいた頭頂部では本来の円筒の端部を若干立ち上がらせている。この穴を閉塞するかたちで島田髷が存在したものと思われ，額の中央には櫛の表現とみられる粘土の貼り付けが認められる。顔面は粘土板を貼り付けて成形しており，顎の鋭い輪郭を呈する。眉の表現はみられないが，粘土の貼り付けによる鼻は筋が通り，均整のとれた目や口とともに端正な顔立ちを表現している。目と口は杏仁形に切りあけられ，左目が長さ2.3cm，幅0.7cm，右目が長さ2.4cm，幅0.5cm，口が長さ2.6cm，幅0.6cmである。左右の耳は粘土の貼り付けによる直径3.0cm程の環状で，耳の中央には貫通しない直径0.5cm程の円孔が認められる。額から頬，顎にかけては赤色塗彩が施され，首の一部にもその痕跡がみられる。胴部は大半が失われているが，胸には女性を示す明らかな膨らみがあり，両肩には着衣の表現と思われるわずかな線刻が認められる。右腕は棒状の粘土を肩部に直接差し込んで肉付けを行った中実式のつくりで，手は胸の下にあてられている。指は大部分が失われているが，基部の状況から1本づつの表現がうかがえ，また，手の甲には籠手らしき粘土の表現が認められる。腕にも赤色塗彩が施され，手首や肘の辺りをめぐるが，その表現は定かでない。全体に色調は茶褐色を呈し，焼成は良好である。

3・4は腕の破片で，現存長は3が10.0cm，4が8.4cmである。いずれも下方に向かう腕の付け根で，棒状の粘土を肩部に差し込んで肉付けを行った中実式のつくりである。色調は黄褐色を呈し，焼成は良好である。

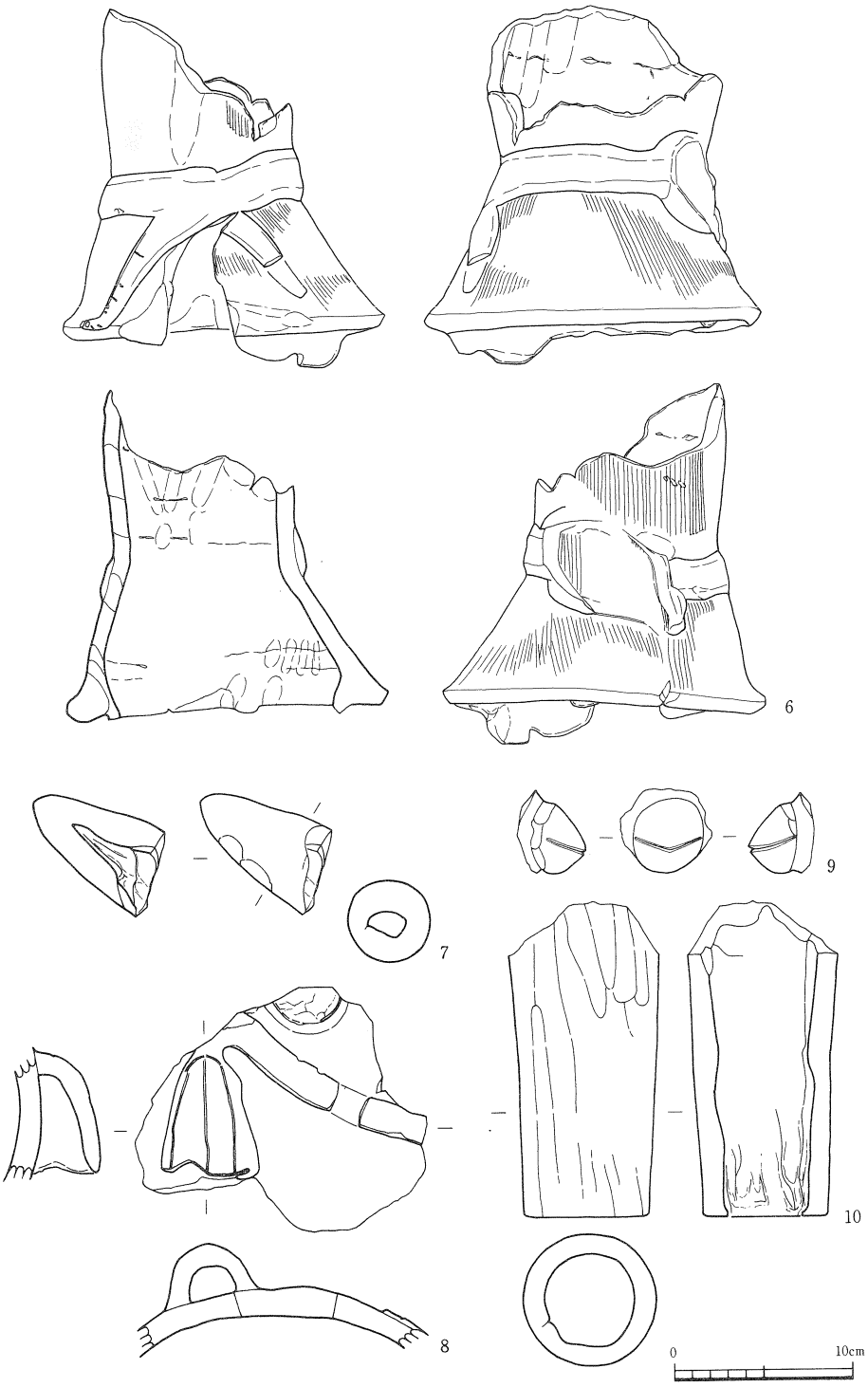
5は裾部の破片である。縦方向のハケが施された表面には，幅3.0cm程の長方形の線刻がみられ，ほぼ全面に赤色塗彩が認められる。やや裾の広がりに欠けるが，線刻は小札を表現し

たものとみられ，この破片は甲を着用した武人埴輪の一部と考えられる。色調は黄褐色を呈し，焼成は良好である。

6は胴部上半以上と台部の大半を欠失した半身像で，現存高は20.0cmである。表面には縦方向のハケが施され，胴部には一部に赤色塗彩が認められる。腰には幅2.5cm程の突帯をめぐらして右腰で結ばれた帯を表現し，そこから下は裾広がりの着衣を表現している。左腰には



第9図　鷺島古墳出土形象埴輪実測図(1)



第10図　鷺島古墳出土形象埴輪実測図（２）

胴部に直接貼付された斜め方向の付属物の痕跡がみられ，腰帯はその部分で途切れている。すでに剝落してしまったこの付属物は，左腰という位置などから判断して大刀であった可能性が高い。接合部がわずかに残る円筒形の台部は直径15cm程である。色調は黄褐色を呈し，焼成は良好である。

馬形埴輪（第10図7～10，図版6）　いずれも破片で，計4点が認められる。

7は尾の部分で，現存長は8.5cm，最大径は4.7cmである。中空で先端が尖り，馬の尾とするにはやや短いかとも思われる。割れ口からは，本体にあけられた孔の縁を尾の内側に引き伸して接合した状況がうかがえる。色調は赤褐色を呈し，焼成は良好である。

8は飾り馬の胸の部分で，現存幅は16.5cmである。幅1.8cmの突帯を貼り付けて胸繋とし，それに垂下するかたちで高さ約7cm，幅5.6cmの馬鐸が表現されている。馬鐸は内部を中空とし，表面には線刻が認められる。この馬鐸の存在により胸と判断したが，上部には円形に剝落した跡がみられ，尻の部分である可能性もある。色調は茶褐色を呈し，焼成は良好である。

9は鈴で，直径は3.9cmである。飾り馬の存在からひとまず馬鈴と判断した。色調は茶褐色を呈し，焼成は良好である。

10は馬の脚部とみられ，現存高は18.0cm，基底部径は7.0cmである。大きな粘土板を巻きあわせて成形しており，内外面の調整はともにナデによる。色調は茶褐色を呈し，焼成は良好である。

（3）まとめ

以上が鷺島古墳から出土した主な遺物の内容である。最後にそれらの遺物が示す年代の検討から本古墳の築造年代についてふれておきたい。

まず，円筒埴輪はいずれも黒斑が認められず，焼成は窖窯によるものとみられる。また，外面調整は1次調整のタテハケのみで，突帯は断面台形を呈し，わずかに知られる透孔の形状は円形である。こうした特徴をもつ円筒埴輪は，川西宏幸による編年の第Ⅴ期に位置付けられ（川西　1988），低平化した突帯はそのなかでもさらに後出的な要素と考えられる。

人物埴輪の腕は棒状の粘土を肩部に直接差し込んで成形した中実式のつくりである。腕の製作技法には中空式と中実式があり，前者は人物埴輪の初現期から6世紀前葉頃まで存続し，後者は6世紀中葉頃に新たに出現した技法と考えられている（若松　1986）。頭部は円筒を基本にし顔面には粘土板を貼り付けて成形しており，女子埴輪では頂部の穴を髷によって閉塞していたとみられる。これらも腕と同様，人物埴輪としては後出的なつくりと考えられる。

馬形埴輪の脚部は，大きな粘土板を巻きあわせて成形した「粘土板円筒化成形」によるものとみられる。群馬県下出土品の検討によれば，馬形埴輪の脚部は，6世紀中葉頃に「粘土板巻き上げ成形」から「粘土板円筒化成形」に変化していったとされ（稲村　1986），茨城県下でも同様の変化が想定される。

以上のように，それぞれの埴輪に与えられる年代には一定のまとまりがあり，それらから総合的に判断すると，本古墳の築造年代は6世紀後半代と考えられる。　（滝沢　誠）

6．宮山観音古墳

（1）立地と現状（図版6）

宮山観音古墳は明野町大字宮山492・493・500番地に所在する前方後円墳である。

岩瀬町の東辺に源を発する桜川は，筑波山西麓を迂回して南流し，土浦で霞ケ浦にそそいでいる。その支流である観音川は，明野町とつくば市の境界で桜川に合流しており，本古墳はそこから2.5km程北の観音川左岸台地上に位置する。古墳の立地する台地は，観音川の開析谷に向かって半島状に突き出しており，古墳はその南辺沿いに前方部を西に向けて築かれている。

この半島状に突き出た台地の標高は最高所で約45m，水田面との比高は約18mで，付近の台地面に比べて一段と高くなっている。そうした立地条件のもと，その北辺には背後に巨岩の露頭を控えた鹿島神社が鎮座し，古墳はそれに通じる参道によって後円部と前方部の間を寸断されている。また，その南辺には後円部の南側を削って観音堂が建てられている。近年では後円部の東側に住宅地が迫り，前方部ではその前端にまで台地を削っての宅地造成が及んでいる。本古墳はこうして随所で原形を損ねているが，なおその墳丘部分において決定的な損壊を免れたのは，古墳を含むこの一帯が永く信仰の森として保全されてきたからにほかならない。

現在，観音堂の裏手に当たる後円部は雑木に覆われ，その頂部には祠が祀られている。いっぽう前方部は，篠竹の繁茂する西側を除いて下草が刈り取られ，南側には植林が行われて，聖域としての整備がはかられている。

（2）墳丘（第11図）

今回の測量調査の結果は第11図の通りである。主軸をN72°Eにとる前方後円墳で，現墳丘長は主軸で約91mである。

後円部は南側が観音堂（西），公民館（東）の建設に際し大きく削り取られ，また東側には裾部間際にまで住宅建設にともなう造成が及んでいる。こうした改変がみられるものの，それ以外の部分では等高線がほぼ同心円状にめぐり，後円部は比較的多くの部分で原形を留めている。裾部は北側で標高39.60m付近に求められ，それと同心円状にめぐる等高線を勘案して復原すると，後円部径は約45mとなる。墳丘の頂部は標高45.60mで，裾部との比高は約6.0mである。現在墳丘の頂部には祠が祀られており，平坦面の広さは直径10m前後である。残りの良い北側から東側の墳丘斜面についてみると，標高40～41m付近に幅4m前後の広い平坦面が，また標高43～44m付近にわずかな緩斜面が認められる。このうち下位の平坦面については，近年まで後円部北側をめぐる道として利用されていた形跡があり，それがどの程度旧状を反映しているかは定かでない。しかし，その高さが後述する前方部中位の緩斜面とほぼ等しいことから，その部分には元来段築にともなう一定の平坦面が存在していたとみてよいだろう。いっぽう上位の緩斜面は明瞭さに欠け，それを即座に段築とするには躊躇せざるをえない。ここではひとまず後円部は2段築成であるとの判断を示しておきたい。

なお，後円部南側の切り取り部直下，観音堂の裏手には，巨石が散在している。その出所に

ついては定かでないが，巨石の形状や切り取り部の状況から判断して，それらが本古墳の埋葬施設にかかわる石材であるとは考えられない。

くびれ部は，鹿島神社に通じる参道によって地山面まで完全に切り通されている。しかし，参道の幅が1.5ｍ程と比較的狭いことから，北側では後円部から前方部に移行する強いくびれを看取することができる。

前方部は，その前端が宅地造成によってわずかに削り取られているほかは，ほぼ原形を留めている。裾部は北側で標高39.60ｍ付近に求められる。南側の裾部については，台地の緩斜面にそのまま移行しているため明確にしがたいが，ほぼ同じ高さとみられる。いま，標高39.60ｍ前後の等高線にしたがって前方部の規模を復原すると，長さ約47ｍ，幅約40ｍという値が得られる。前方部の上面は，先端部に幅15ｍ程の平坦面をもち，緩斜面をなす鞍部をへて標高42ｍ前後で後円部に接続していたとみられる。頂部は標高43.30ｍで，裾部との比高は約3.7ｍ，後円部との比高は約2.3ｍである。稜線から隅角部にかけての残りは良く，その角度は75°前後である。北側の墳丘斜面には標高41～42.5ｍ付近に緩斜面が認められ，南側の斜面にもわずかにそうした状況がみられることから，前方部についても段築の存在が想定される。

墳丘をめぐる周溝については，現状でその存在を明示できるような証拠は得られなかった。ここでは，墳丘の北側で，墳丘を離れるにしたがい現地形がわずかではあるが高さを増していくという事実を述べておきたい。

なお，今回の測量調査にともなう表面観察では，葺石と思われるものはまったく認められなかった。また埴輪についても，切り取り部や表面露出部分が少なくないにもかかわらず，その破片をいっさい採集することはできなかった。

（３）まとめ

以上の調査結果を整理すると，宮山観音古墳の規模は，墳丘長約92ｍ，後円部径約45ｍ，前方部長約47ｍ，前方部幅約40ｍ（以上復原）となり，その高さは後円部で約6.0ｍ，前方部で約3.7ｍとなる。これによって宮山観音古墳の墳丘の特徴を要約すれば，前方部の高さが後円部の高さに比べてかなり低く前方部幅が後円部径をいまだ上回ってはいないこと，それに対して後円部径と前方部長がほぼ拮抗し長さの点で前方部の発達が著しいこと，といった点が指摘できる。

こうした前方後円墳の墳形については，上田宏範が型式学的観点からの分類を試みている（上田　1979）。本古墳では前方部の稜線が比較的原形を留めていることから，そうした分類による墳形の把握が可能である。そこでその作図法により前方部長を前方部後長30ｍと前方部前長17ｍにわけると，BC：CP：PD＝６：4.0：2.3となる。もちろんこの比率については，各計測値をどのように求めるかによって多少の変動がある。しかしそれによってもなお，前方部前長が後円部半径の値を下回るという事実に変更はみられず，本古墳は概念的に上田分類のＡ型式に属し，古式な墳形を留めるものといえる。

ところで，本古墳の築造年代については，埋葬施設の内容や埴輪の存在が知られておらず，

第11図　宮山観音古墳墳丘測量図

現状ではこうした墳形の特徴を手がかりにするほかはない。

そこで，墳形以外からの年代推定がある程度可能な近隣の前方後円墳の墳形についてみると，まず今回同時に測量成果を報告した下館市葦間山古墳の状況が参考になる。すでに示したように，葦間山古墳ではとくに前方部において著しい墳丘の改変がみられるが，約82m と復原される後円部径が前方部幅をはるかにしのぐことは疑いのないところである。むろん後円部と前方部の比高が著しかったであろうことも想像に難くない。この古墳については，採集された壺形埴輪に照らして4世紀末から5世紀初頭という年代が与えられる。さらに規模の点では異なるものの，宮山観音古墳と同じ桜川水系に位置するつくば市山木古墳（上川名　1975）の墳丘においても同様の特徴が指摘できる。山木古墳は，石釧等を出土したつくば市桜塚古墳（前方後方墳：蒲原・松尾　1981）とは谷ひとつ隔てた位置にあり，その出土遺物からも桜塚古墳に後続する5世紀初め頃の首長墓と目される。以後5世紀から6世紀にかけては良好な事例に恵まれないが，同じく桜川水系に位置するつくば市八幡塚古墳（茂木ほか　1979）において，なお後円部径が前方部幅を上回っているという事実には留意しておきたい。八幡塚古墳は，出土した埴輪から6世紀初め頃の年代が与えられており（塩谷　1985），筑波山の西側の地域では，少なくともその頃まで前方部幅が後円部径を上回るような墳形の採用は行われなかったということを示しているからである。

これと同様の状況は，石岡市を中心とした霞ケ浦沿岸地域の前方後円墳についても指摘できる。ただし，茨城県下最大の規模をもつ石岡市舟塚山古墳（大塚・小林　1964b）は，埴輪等から5世紀中葉頃の年代が与えられ（車崎　1976），前方部幅が後円部径を上回っているが，これも全体の規模からいえば，前方部幅が後円部径を凌駕するというまでにはいたっていない。豊富な副葬品の出土で知られる玉造町三昧塚古墳（斉藤ほか　1960）の例などからみて，この地域でも6世紀に入る頃まで，原則として前方部幅が後円部径を上回るような墳形の採用は行われなかったとみてよさそうである。ところが6世紀も半ばを過ぎる頃になると，玉里村舟塚古墳（大塚・小林　1968・1971）や出島村富士見塚古墳のように前方部幅が後円部径を凌駕するような墳形の採用がみられ，同時に前方部の高さも後円部の高さに並ぶかそれをしのぐにいたっているのである。

こうした墳形の変化は従来から指摘されるところだが，上田宏範も述べているように（上田1985），茨城県下では畿内で古式とみられる墳形が6世紀に入る頃まで認められるという点には注意しておく必要がある。そうした点からすれば，古式な墳形を留めるとはいえ前方部幅が後円部径に迫りつつある宮山観音古墳の年代は，5世紀代とみるのが穏当である。これに加えて後円部径と前方部長がほぼ等しいという特徴をとらえ，そこに上田分類B'型式（BC：CP：PD＝6：3：3）の影響を認めるとすれば，宮山観音古墳の年代はそのなかでも中葉以降の時期と考えられるだろう。いずれにせよ現状からの推論には限界があり，宮山観音古墳については今後発掘調査などによるさらなる実態の究明がまたれるところである。　（滝沢　誠）

Ⅳ　鬼怒川中流域における古墳の調査

―八千代町所在の古墳―

1．遺跡の環境

（1）周辺の地形

栃木県北西部の日光連峰に源を発する鬼怒川は関東平野の中央部を南流して，現在茨城県北相馬郡守谷町で利根川に合流している。鬼怒川の両岸には肥沃で広大な沖積地が形成されており，茨城県結城郡八千代町はそうした鬼怒川の中流域右岸（西岸）に位置する。同町の南西には飯沼川の沖積地があり，この二つの沖積地にはさまれた地域は結城台地と呼ばれる洪積台地となっている。この結城台地の標高は，結城市付近で約40ｍ，八千代町北西部で約29ｍ，同町中央部で約27ｍ，同町南西部で約21ｍと，南に行くほど高度を減じている。ただしこれは一定の傾斜で低くなるのではなく，２～３ｍの緩斜面をもって段丘状に低くなっているのであり，台地の上面はほぼ起伏のない平坦面を形成している。またこの台地は，北西から南東に流れる山川などの河川によって樹枝状に開析されており，６～８ｍほどの急崖となっている部分もあるが，多くの場合その縁辺部は緩やかな斜面となって低地に移行している。

今回調査を実施した香取神社古墳，仁江戸11号墳，別府遺跡は，いずれも八千代町大字仁江戸地区内に所在し，古墳はともに仁江戸古墳群に含まれる。地形的には鬼怒川右岸の結城台地縁辺部に立地し，鬼怒川の旧河道である山川は現在その北側で鬼怒川と合流している。

（2）古墳時代の遺跡（第12図）

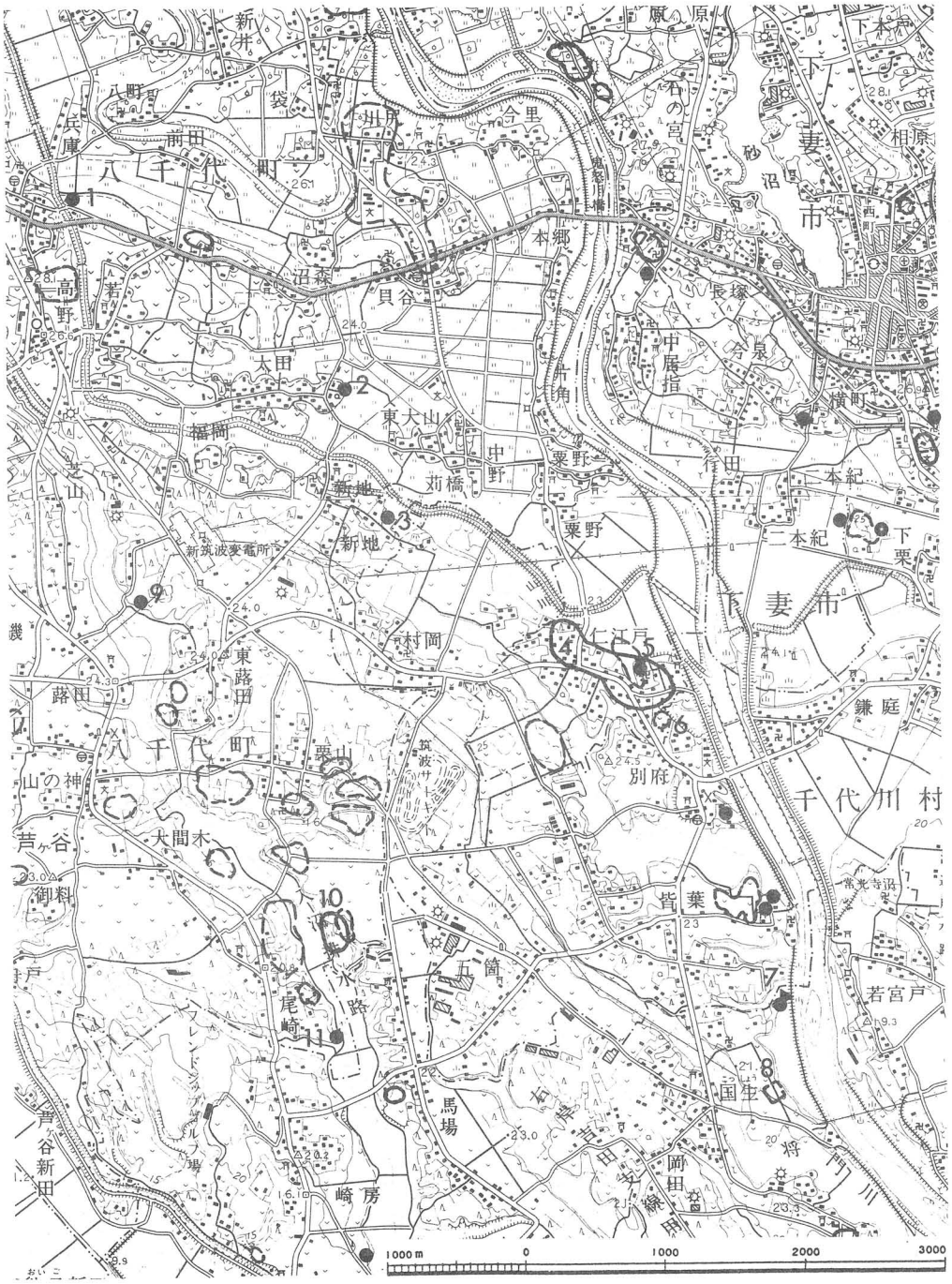
八千代町を中心とした古墳時代の遺跡分布をみていくと，まず集落とみられる遺跡は，八千代町内で現在24遺跡が確認されている（山野井　1987）。ただしこのうちの半数以上は旧飯沼の入江に面した台地上に立地しており，鬼怒川右岸における遺跡の分布は稀薄である。こうした分布状況は弥生時代からのあり方を受け継いだものだが，今回報告する別府遺跡(6)は，香取神社古墳の存在とともに注目される鬼怒川右岸では数少ない古墳時代前期の遺跡である。

次に古墳についてみると，かつて八千代町内には40基以上が存在したと考えられるが，現存するものは25基程度である。それらの分布状況は集落とほぼ同様で，墳形は前方後円墳３基を除いてすべて円墳である。以下，主な古墳について概観していきたい。

まず鬼怒川右岸地域の八千代町内には21基が現存するが，そのうちの17基は仁江戸古墳群に属し，他はそれぞれ単独に存在する。

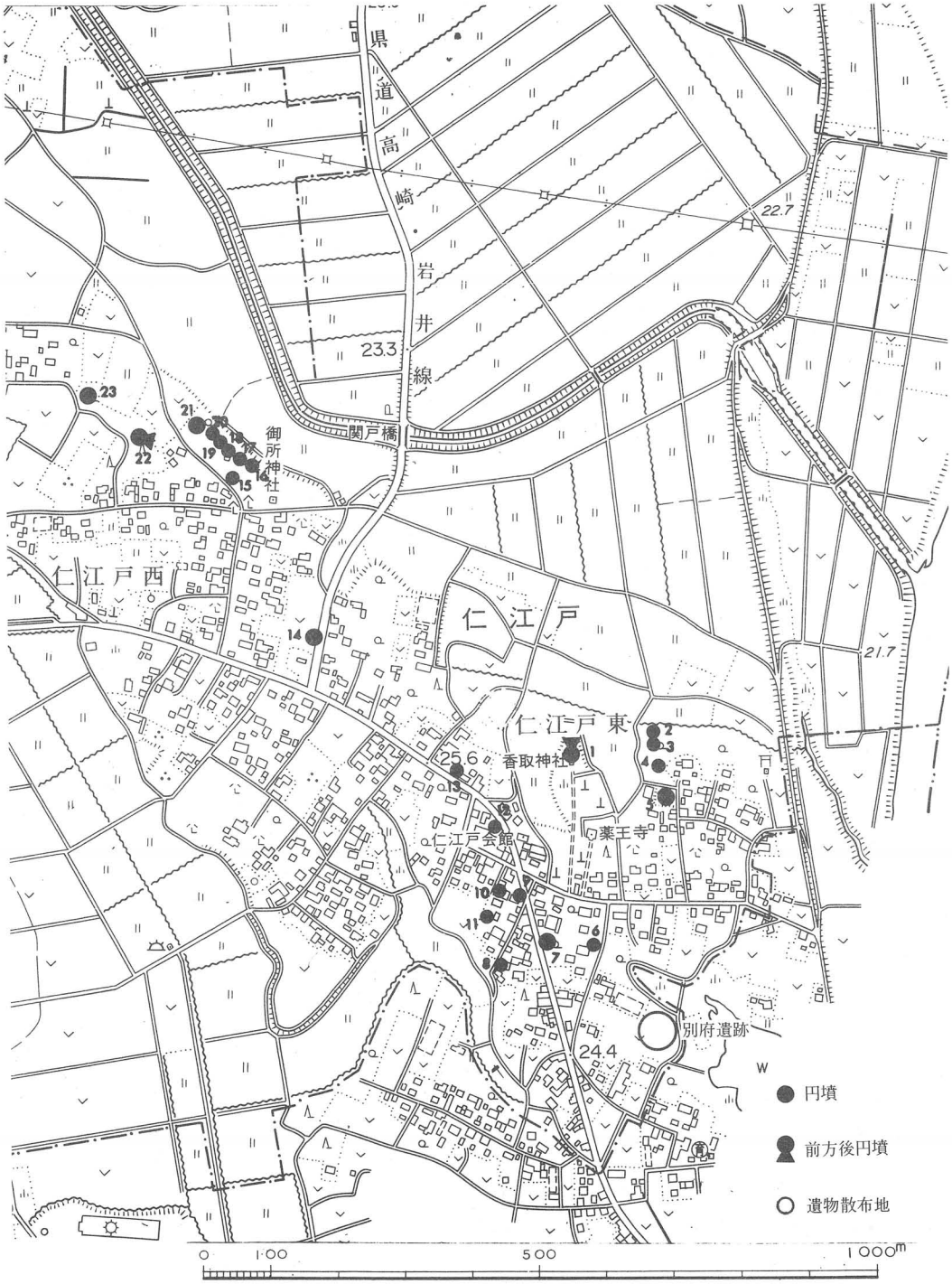
浅間山神社古墳は鬼怒川右岸の低地に立地する円墳で，直径は約20ｍ，高さは約５ｍである。

西大山赤城山古墳は山川の右岸台地上に立地する。墳丘の半分ほどが破壊されているが，直



第12図　遺跡周辺の地形と古墳時代の遺跡分布

1.菅谷天神塚古墳　2.太田古墳　3.宿古墳　4.仁江戸古墳群　5.香取神社古墳　6.別府遺跡　7.東山古墳　8.国生本屋敷遺跡　9.蕗田塚山古墳　10.城山古墳群　11.秋葉神社古墳
（点は古墳，太線内は古墳群，破線内は遺物散布地）



第13図　仁江戸古墳群分布図

第１表　仁江戸古墳群

（単位:m）

番号	古 墳 名	所　　在　　地	墳形	全長・直径	高　さ	遺　物	備　　考
1	香取神社古墳	八千代町仁江戸1305, 1306	前方後円	71	後円部 6.5 前方部 2.0	壷形埴輪	
2		〃　1289	円	8.5	0.5		
3		〃　1289	円	8.5	0.5		
4		〃　1286-2	円	12	1.5		
5		〃　1282-1	円	32	7.5	埴輪	墳丘頂部に浅間社
6		〃　1633-1	円	17.5	1.5		
7		〃　1630-1	円	26.5	4.5		
8		〃　1636-1	円	12.5	1.7		
9		〃　1626-3	－	－	－		墳丘現存せず
10		〃　1625-1	－	－	－		墳丘現存せず
11		〃　1625-2	－	－	－	鉄刀　鉄鏃 刀子ほか	昭和32年石室開口 墳丘現存せず
12		〃　1359-2	－	－	－		墳丘現存せず
13		〃　1363-2	円	11.5	2.5	埴輪	墳丘半壊
14		〃　1422-4・14	円	18	2.4		墳丘半壊
15	小桜塚古墳	〃　1428	円	12.5	1.0		
16	不動塚古墳	〃　1426	円	6.5	0.5		
17		〃　1426	円	5	0.5		
18	観音塚古墳	〃　1426	円	5	0.5		
19	庚申塚古墳	〃　1426	円	15	0.5		
20	稲荷山古墳	〃　1426	円	13	1.2		
21	愛宕塚古墳	〃　1447	円	26	3		町指定史跡
22		千代川村柴崎676-1・2	前方後円	49	後円部 4.4 前方部 1.5		
23		〃　686-1	円	30	6.4		墳丘頂部に浅間社

径20m，高さ５m程度の円墳と推定される。

菅谷天神塚古墳(1)は山川の右岸台地上に立地する直径約40m，高さ約５mの円墳である。墳丘の頂部には天神社が祀られており，墳丘の頂部は削平されていると考えられる。

太田古墳(2)は山川左岸の台地先端部に立地する。水道工事の際に発見された石棺によりその存在が確かめられ，昭和62年に発掘調査が実施された。墳丘はすでに削平され，その形状，規模は不明だが，石棺からは計５体の人骨とともに，鏡，玉類，鉄刀，鉄鏃などの豊富な副葬品が出土した（岩崎・谷中ほか　1989)。

宿古墳(3)は山川右岸の台地縁辺部に立地する。大部分は道路で破壊されているが，直径約20m，高さ２～３mの円墳であったと考えられ，周辺からは円筒埴輪の破片が採集されている。

仁江戸古墳群(4)は山川と鬼怒川が合流する地点をのぞむ鬼怒川の右岸台地上に立地する。今回の分布調査では，墳丘がすでに失われたもの４基を含む計23基の古墳を確認した（第13図)。その内訳は，前方後円墳２基，円墳21基である（第１表)。香取神社古墳(5)は北へ突出した舌状台地の先端部に立地する前方後円墳で，前方部を北に向けている。円墳は墳丘の大部分が失われているものもあるが，直径10～20m程度のものが主体を占める。昭和32年，そうした円墳の主体部とみられる石室が現地表下から偶然に発見され，石室内からは３体の人骨とともに鉄刀，鉄鏃，刀子などの副葬品が出土した。人骨を除く遺物は現存しており，今回香取神社古墳の測量調査にともないそれらの遺物についても実測調査を行い，仁江戸11号墳出土遺物としてその内容を報告することとした。このほか当古墳群に関しては，江戸時代の記録に埴

輪の出土が伝えられており，現在でも数基の古墳で埴輪の破片を採集することができる。

なお仁江戸古墳群は，従来八千代町大字仁江戸地区内に群在する古墳のみを指すものである。しかし，この台地には仁江戸地区と接するかたちで千代川村大字村岡地区があり，そこには柴崎古墳群が存在する。柴崎古墳群は仁江戸古墳群と同じ台地状に立地し，仁江戸古墳群とは一連の分布状況を示すことから，ひとまずここでは両古墳群を合わせて仁江戸古墳群と呼称することにした。

このほか鬼怒川の右岸地域では，八千代町に接した石下町大字国生にかつて東山塚古墳(7)が存在した。東山塚古墳は鬼怒川右岸の台地上に立地し，前方部を北東に向けた全長72ｍ程の前方後円墳であったと考えられている。近年この１km南方に位置する国生本屋敷遺跡(8)で発掘調査が行われ，方形の濠に囲まれた古墳時代前期の竪穴住居跡４軒が検出された（阿部1988)。東山塚古墳は古墳時代前期の築造とみられることから，該期における首長層の居住地と墓地との関係を示す事例として注目される。

さて再び八千代町内に目を転じると，旧飯沼の入江に面した台地上には現在４基の古墳が確認できる。

蕗田塚山古墳(9)は旧飯沼入江の左岸台地上に立地する前方後円墳である。墳丘の規模は，全長約20ｍ，後円部径約10ｍ，前方部幅約12ｍである。

城山古墳群(10)は旧飯沼入江の左岸台地上に立地する。以前は13基の円墳によって構成される古墳群であったが，現存する古墳は２基のみである。規模は最大のもので直径20ｍ程度であったとされ，現存する２基は直径約10ｍである。この古墳群では過去に何回か発掘が行われ，石棺から人骨や鉄刀などが出土するとともに，円筒埴輪や形象埴輪も出土した。しかし現存する遺物は少なく，円筒埴輪数点と人物埴輪の一部が残されているのみで，現在奈良市大和文華館には国の重要文化財男子立像埴輪が所蔵されている。また，昭和51年には古墳群中の栗山矢尻古墳が発掘調査され，現地表下から箱形石棺が検出されたが，人骨２体のほかに目立った遺物の出土はみられなかった。同古墳は直径約24ｍの円墳で，幅約２ｍ，深さ約0.3ｍの周溝をめぐらしていた。

秋葉神社古墳(11)は旧飯沼入江の右岸台地上に立地する全長約30ｍの前方後円墳である。明治25年に主体部とみられる石棺が発見され，その際の記録によれば，人骨２体，大刀２，槍１，刀子２が出土したとされる。人骨は古墳の北側に埋め戻され，出土した遺物も現存しないが，棺材の一部が石碑に利用され今日にいたっている。なお，この古墳の周辺には他に数基の古墳が存在したとされるが，現在墳丘を確認することはできない。

以上，八千代町を中心とした主な古墳の内容をみてきたが，それらの築造年代に関しては，近年発掘調査が行われたものを除けば不明な点が多い。ただし数少ない知見によれば，埋葬施設である石棺を墳丘の頂部ではなく地表下に埋設している例がいくつか認められる。茨城県や千葉県北部にはそのような古墳が古墳時代後期においてよくみられることから，当地域に分布する古墳の多くもそうした古墳の一群に含まれるものとみてよいだろう。　　（谷中　隆）

2．香取神社古墳

（1）立地と現状（図版7）

香取神社古墳は八千代町大字仁江戸1305・1306番地に所在する。古墳は，仁江戸の集落がある台地から鬼怒川の旧河道である山川に向けて北に突出した舌状台地の先端に立地しており，現在周囲は水田や畑になっている。台地の標高は約24m，周囲の耕作面との比高は約2.5mである。墳丘の裾部を含む台地の周縁は用水路や農道によって削り取られており，崖面には台地を構成する土層が露出している。また後円部上には香取神社が鎮座しており，この社殿の建造と境内の造成のために，とくに後円部の南側では原形を大きく損ねている。

（2）墳丘（第14図）

本古墳は前方部を北側に向けた前方後円墳とみられ，主軸をほぼN6°Eにとる。墳丘の現存長は約71mだが，後円部北側の改変を考慮すれば，本来の全長はそれよりも若干短くなると考えられる。

後円部は，その南西側で標高23.7m付近に傾斜変換線がみられ，また南東側でも標高24.0～24.25m付近に傾斜変換点が認められる。これらの部分はいずれも旧状を留めていると思われ，本来の墳丘の裾部を示すものと考えられる。墳丘の頂部は標高30.25mで，現在は復原径14m程の半円形を呈する平坦面となっている。測量調査時に行った聞き取りによれば，大正期に現在の社殿を建造する際，この墳丘頂部に土を盛ったとのことであり，本来の頂部はいまよりいくぶん低いところになると考えられる。実際，後円部北側の墳丘斜面を良く観察してみると，標高29.25m付近にわずかな傾斜の変換が認められ，それが本来の墳丘と盛り土との境界になる可能性もある。なお，現状における後円部の高さは約6.5mである。

くびれ部にあたる部分はすでに削り取られてしまい，標高24m前後の平坦面となっている。平坦面は東側および西側に向かって緩やかに傾斜しているが，傾斜の変換は認められないまま台地の縁辺へと達しており，墳丘の裾部は不明である。元来墳丘の低い部分が削り取られたのであろうが，それがいつ，どのような事由によるものなのかは今日記憶されていない。

前方部は現在直径15m程の円丘状を呈し，前面に移行する稜線は東側，西側とも明確ではない。墳丘の裾部は，東側で標高24m付近に求められるが，北側と西側では用水路のために削り取られている。頂部は標高25.94mで，わずかな平坦面を有する。

後円部，前方部を通じた墳丘の観察によれば，段築の形跡は認められず葺石も存在しないようだが，測量調査の前後に多数の壷形埴輪が採集されたことは特筆されよう。その採集地点にはやや偏りがみられ，後円部においては南西から北東にかけての墳丘中位から裾部で多くが採集された。また後円部の頂部では，底部とみられる破片がいくつか採集された。そして注目すべきは，くびれ部の西側にあたる部分で，比較的大きな口縁部の破片が予想される墳丘の裾部に沿って列状に採集されたことである。破片は用水路で削られた台地の崖面，現地表下50cm程のところで採集され，本古墳における壷形埴輪の配列状況を示唆するものであった。表面採

集の地点から原位置を判断することは少々無謀とも思われるが，後円部頂および墳丘裾部に採集地点が集中するという以上の事実から，いまはそれらの位置に壷形埴輪が配列されていたと想定しておきたい。

以上の測量成果にもとづき本古墳の規模を復原すると，全長約70ｍ，後円部径約45ｍとなり，後円部の頂部は現在より１ｍ程低く直径約15ｍの平坦面を有していたとみて，後円部の高さは約5.5ｍとなる。また，全長から後円部径を引いた前方部長は約25ｍ，前方部幅は約14.4ｍ，同高さは約２ｍである。（谷中　　隆）

（３）遺物（第15・16図，図版７・８）

墳丘とその周辺から整理箱１箱分の遺物が採集された。それらはいずれも壷形埴輪の破片で，整理の結果，口縁部４点，頸部１点，底部３点について器形の復原が可能であった。以下それらについて述べるとともに，線刻を有する破片等についてもあわせて報告する。

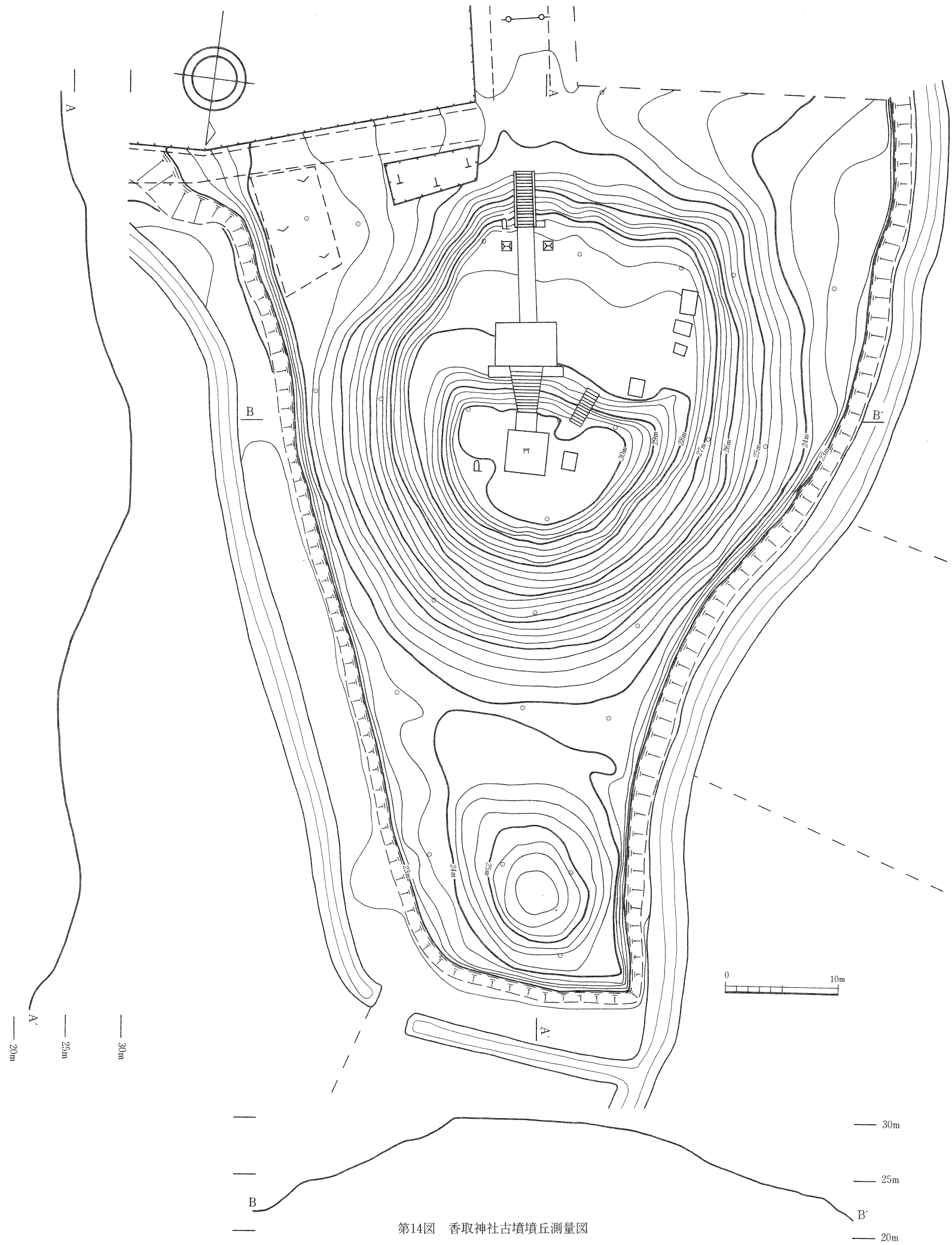
１は西側くびれ部崖面で得られた口縁部から頸部にかけての破片である。全周の50％が現存し，復原による口径は37.0ｃｍである。頸部は内彎しながら膨らみをもって立ち上がり，口縁部との間に段を有して，口縁部はその中程から外反する。いわゆる有段口縁であるが，粘土の貼り付けによる段部は明確な稜を形成せず，表面には顕著な指頭痕を残す。外面調整は，口縁端部がヨコナデ，口縁部が縦方向のハケ，頸部がナデである。また内面調整は，ヘラ状工具による横方向のナデである。色調は橙褐色を呈し，内外面に赤色塗彩が認められる。胎土には砂粒を若干混入し，焼成は良好である。

２は西側くびれ部崖面で得られた口縁部の破片である。口縁端部に向かって大きく外反しており，復原による口径は41.7ｃｍである。調整は内外面ともナデにより，断面には輪積みの状況が明瞭に観察できる。色調は明褐色を呈し，内外面に赤色塗彩が認められる。胎土には長石粒，石英粒を多量に混入し，焼成は良好である。

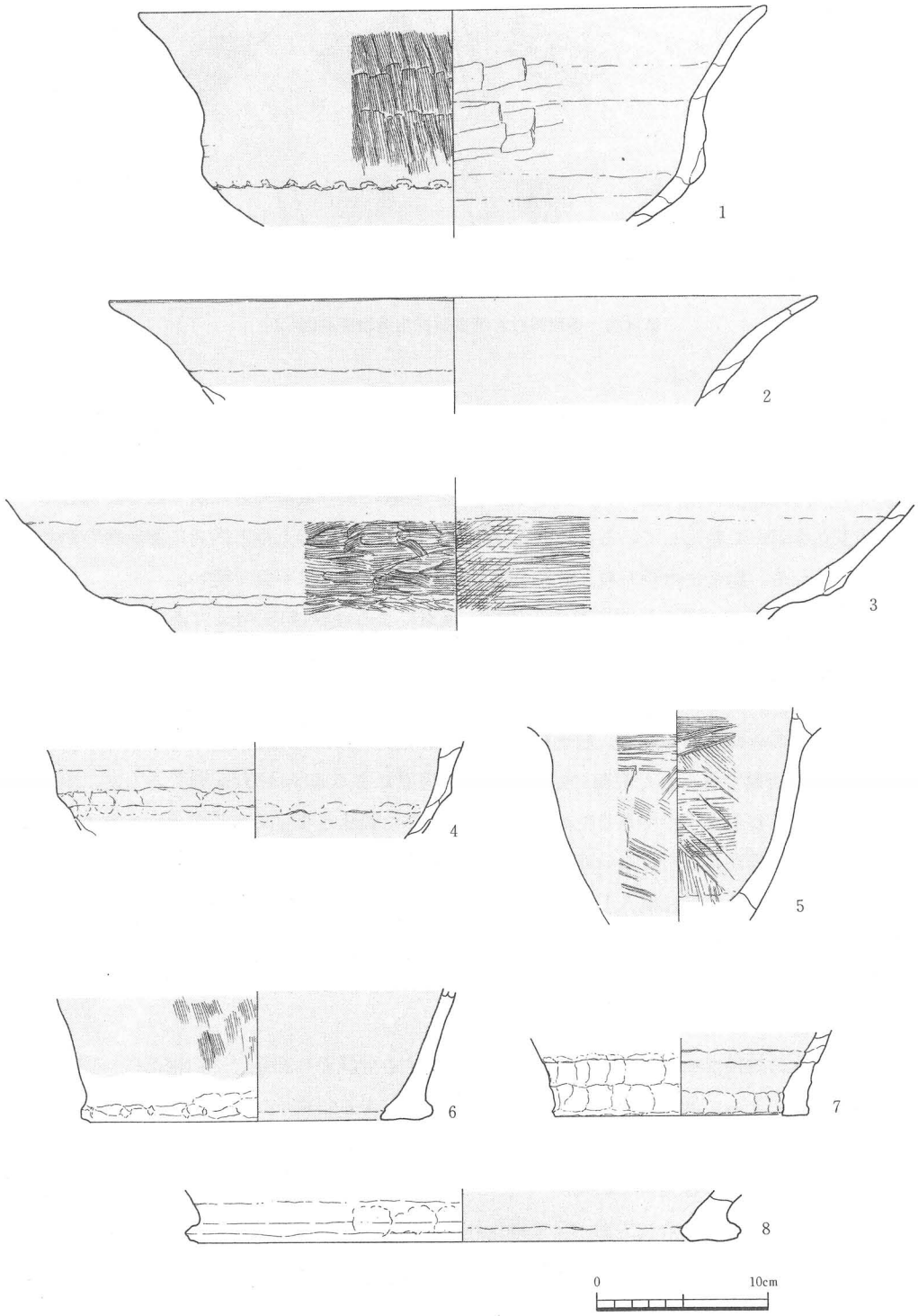
３は後円部西側で得られた口縁部から頸部にかけての破片で，口縁端部を欠失する。大きく開く口縁部と内彎する頸部とからなる有段口縁で，粘土の貼り付けによる段部は不明瞭である。復原による段部の直径は44.3ｃｍである。調整は内外面とも粗いハケによる。色調は明褐色を呈し，内外面に赤色塗彩が認められる。胎土には長石粒，砂粒を混入し，焼成は良好である。

４は西側くびれ部崖面で得られた口縁部から頸部にかけての破片で，口縁端部を欠失する。頸部は内彎しながら立ち上がり，口縁部との間にわずかな段を形成する。有段口縁ではあるが，粘土の貼り付けによる段部は明確な稜を形成せず，表面には顕著な指頭痕を残す。復原による段部の直径は23.2ｃｍである。調整は内外面とも横方向のナデにより，器面には輪積み痕を明瞭に残す。色調は明褐色を呈し，内外面に赤色塗彩が認められる。胎土には長石粒，石英粒を混入し，焼成は良好である。

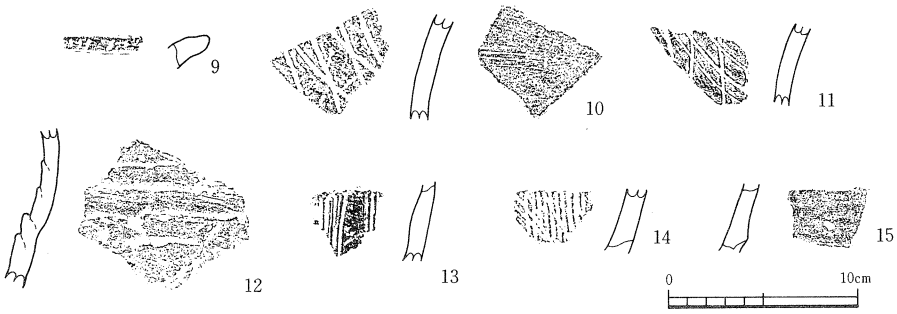
５は東側くびれ部近くの後円部中位で得られた頸部の破片である。細くすぼまった部分から弱く内彎して立ち上がり，口縁部との接合部で外反している。調整は内外面とも粗いハケによる。色調は暗褐色を呈し，内外面に赤色塗彩が認められる。胎土には長石粒，石英粒，砂粒を



第14図　香取神社古墳墳丘測量図



第15図　香取神社古墳表面採集遺物実測図(１)



第16図　香取神社古墳表面採集遺物実測図(２)

混入し，焼成は良好である。

６は底部の破片で，復原による底径は20.7 cm である。底部から胴部に向かっては直線的に立ち上がっており，全体としてはかなり胴長の器形が想定される。外面調整は縦方向のハケおよびナデ，内面調整は横方向のナデによる。また，自重により底部外方に張り出した部分は，ヘラ状工具を用いて整形している。色調は暗褐色を呈し，外面の上半と内面に赤色塗彩がわずかに認められる。胎土には長石粒，砂粒を多量に混入し，焼成は不良で脆い。

７は後円部南東側で得られた底部の破片で，復原による底径は15.0 cm である。６と同様に底部から胴部に向かっては直線的に立ち上がっている。内外面には輪積み痕が認められ，その接合部分には顕著な指頭痕を残す。器面の状態が良好ではないが，色調は暗黄褐色を呈し，赤色塗彩は内面のみに認められる。胎土には砂粒を混入し，焼成はほぼ良好である。

８は後円部西側で得られた底部の破片である。復原による底径は33 cm 程であるが，指頭痕を明瞭に残す不整形な小片であるため，ややかけ離れた数値となっているおそれもある。７と同様に器面の状態が良好ではないが，色調は暗赤褐色を呈し，赤色塗彩は内面のみに認められる。胎土には砂粒を多量に混入し，焼成は不良である。

９は後円部北東で得られた突帯の破片で，端部にはヘラ状工具による刻みが施されている。色調は明赤褐色を呈し，内外面に赤色塗彩が認められる。胎土には砂粒を混入し，焼成はほぼ良好である。

10は北西側の後円部中位で得られた破片で，外反する形状から推定して口縁部の一部と考えられる。ナデによって調整された外面にはヘラ状工具による斜格子状の沈線が施され，内面には粗いハケが認められる。色調は明赤褐色を呈し，内外面に赤色塗彩が認められる。胎土には長石粒を混入し，焼成は良好である。

11は東側くびれ部近くの後円部中位で得られた破片で，口縁部の一部と考えられる。調整は内外面ともナデにより，外面にはヘラ状工具による斜格子状の沈線が認められる。色調は明赤褐色を呈し，内外面に赤色塗彩が認められる。胎土には砂粒を若干混入し，焼成は良好である。

12は底部に近い胴部の破片である。外面にはヘラ状工具によるナデ調整が施され，内面には輪積み痕を明瞭に残す。色調は暗褐色を呈し，赤色塗彩は認められない。胎土には砂粒を多量

に混入し，焼成は不良で脆い。

13は後円部の墳丘頂部で得られた破片で，口縁部あるいは頸部の一部と考えられる。外面には半載竹管状の工具による縦方向の沈線が認められる。色調は明赤褐色を呈し，内外面に赤色塗彩が認められる。胎土には長石粒，砂粒を混入し，焼成は良好である。

14は後円部西側で得られた破片で，13と同様に口縁部あるいは頸部の一部と考えられる。外面には，縦方向の沈線を密に施したのち，さらに斜め方向の沈線を加えている。色調は明褐色を呈し，赤色塗彩は確認できない。胎土には長石粒を若干混入し，焼成は良好である。

15は有段口縁の段の部分の破片である。調整は内外面とも横方向のナデにより，内面には籾痕を残す。色調は明赤褐色を呈し，わずかに赤色塗彩が認められる。胎土には長石粒，砂粒を混入し，焼成は良好である。

（4）まとめ

調査前，本古墳については前方後円墳とみるか，それぞれの墳丘を独立した古墳とみるか，意見の分かれるところであった。しかし調査の過程において，用水路掘削により生じた西側の崖面で壷形埴輪が列状に採集されるに至り，前方後円墳であるとの確証を得た。全長は後世の改変を考慮に入れても70ｍ前後に達し，茨城県下の鬼怒川流域では最大級の墳丘規模をもつ。後円部には香取神社の造営にあたって土盛りがなされたというが，それを考えても前方部とはかなり高さの差がある。加えて，後円部径に対して前方部長がきわめて短く，その幅も狭いことから，本古墳は古式な墳丘の特徴を備えているといえるだろう。

採集した遺物はいずれも壷形埴輪で，円筒埴輪は認められなかった。この壷形埴輪は今回の採集品だけでもかなりの個体数にのぼるとみられ，また，戦後幾度となく盗掘を受けているが，その際に発見されたのはすべて「壷」であったという。先に想定した壷形埴輪の樹立位置についてはなお発掘調査による検証の余地を残すが，こうした量的状況も壷形埴輪の列状配置をある程度支持するものといえよう。

本古墳の壷形埴輪における最大の特徴は，胴長の器形と粘土の貼り付けにより不明瞭な段を形成した有段口縁である。周辺地域でこれに類似したものとしては，岩井市上出島２号墳出土品（大森ほか　1975）があげられる。昭和50年に発掘調査が行われた上出島２号墳は全長56ｍの前方後円墳で，そこでは後円部頂と墳丘の裾部において壷形埴輪の配列が検出された。壷形埴輪は胴長で外反する有段口縁を有し，外面にはハケ，内面にはナデによる調整が施されている。後円部に設けられた粘土槨からは，滑石製勾玉，管玉，鉄剣，鉄鏃，鉄斧，鉄針が出土しており，こうした出土遺物から上出島２号墳の築造年代は５世紀前葉頃と考えられる。

以上のような上出島２号墳の内容は，本古墳における壷形埴輪の配列状況について示唆を与えるばかりでなく，その年代を考える上でも大いに参考になる。むろん壷形埴輪についてはさらに視野を広げた系統的な位置付けが必要であろうが，ここでは両古墳の壷形埴輪にみられるきわめて類似した型式的特徴を認めて，香取神社古墳についても５世紀前葉という築造年代を想定しておきたい。

（白石　典之）

3．仁江戸11号墳

（1）立地と現状

仁江戸11号墳は八千代町大字仁江戸1625番地の小口長太郎氏邸内に所在する。昭和32年11月19日，邸内にイモ穴を掘った際，偶然に埋葬施設が発見された。当時の関係者によれば，その時すでに墳丘はなく，竪坑を2.7ｍ程掘りそこから横に2.7ｍ程掘り進んだところで石の壁に当たったとのことである。礫をはずして内部に入ると，内部は腰をかがめて歩ける程の高さで，長さ2.1ｍ，幅1.2ｍ程の床には頭位をそろえて３体が埋葬されていたという。その際「鉄刀６，鉄鏃，三角形の鉄板（？）」が出土したとされ，現在八千代町立歴史民俗資料館には，鉄刀残欠，刀装具（鐔２，鏶１，鞘尻金具１），鉄鏃多数，鹿角製刀子１が収蔵されている。

今回香取神社古墳の測量調査を機に，同館所蔵の本古墳出土品についても実測調査を行ったので，以下にその主な遺物の内容を報告する。

（2）遺物（第17図）

鉄刀（１～５）　いずれも平棟平造りで，３～５は順に，身幅2.7cm，3.0cm，2.3cm，棟幅0.5cm，0.5cm，0.8cmである。１・２は茎尻である。ともに一文字尻で目釘を有する。

鐔（６・７）　鉄製の倒卵形無窓鐔で，６は長径7.5cm，７は長径7.7cmである。

鏶（８）　鉄製で１/３を欠失する。長さは2.0cmで，端部を約0.2cm外方へ折り曲げている。

鞘尻金具（９）　鉄製で大部分を欠失する。長さは1.7cmである。

鉄鏃（10～15）　いずれも棘篦被を有するが，鏃身の形態は様々である。銹化が著しく，鏃身の断面形態については不明なものが多い。

10は鏃身長三角形を呈し，深い腸抉を有する。全長11cm～，鏃身部長５cm程，同幅２cm～，頸部長4.5cmである。

11は鏃身剣身形を呈し，片平鎬造りで腸抉を有する。鏃身部長4.8cm，同幅1.0cmである。

12は鏃身柳葉形を呈し，片切刃造りで腸抉を有する。鏃身部長2.7cm，同幅1.0cmである。

13・14は鏃身柳葉形を呈する。断面形態，腸抉の有無については判然としない。全長12cm～，鏃身部長2.2～2.5cm，同幅1.0～1.2cmである。

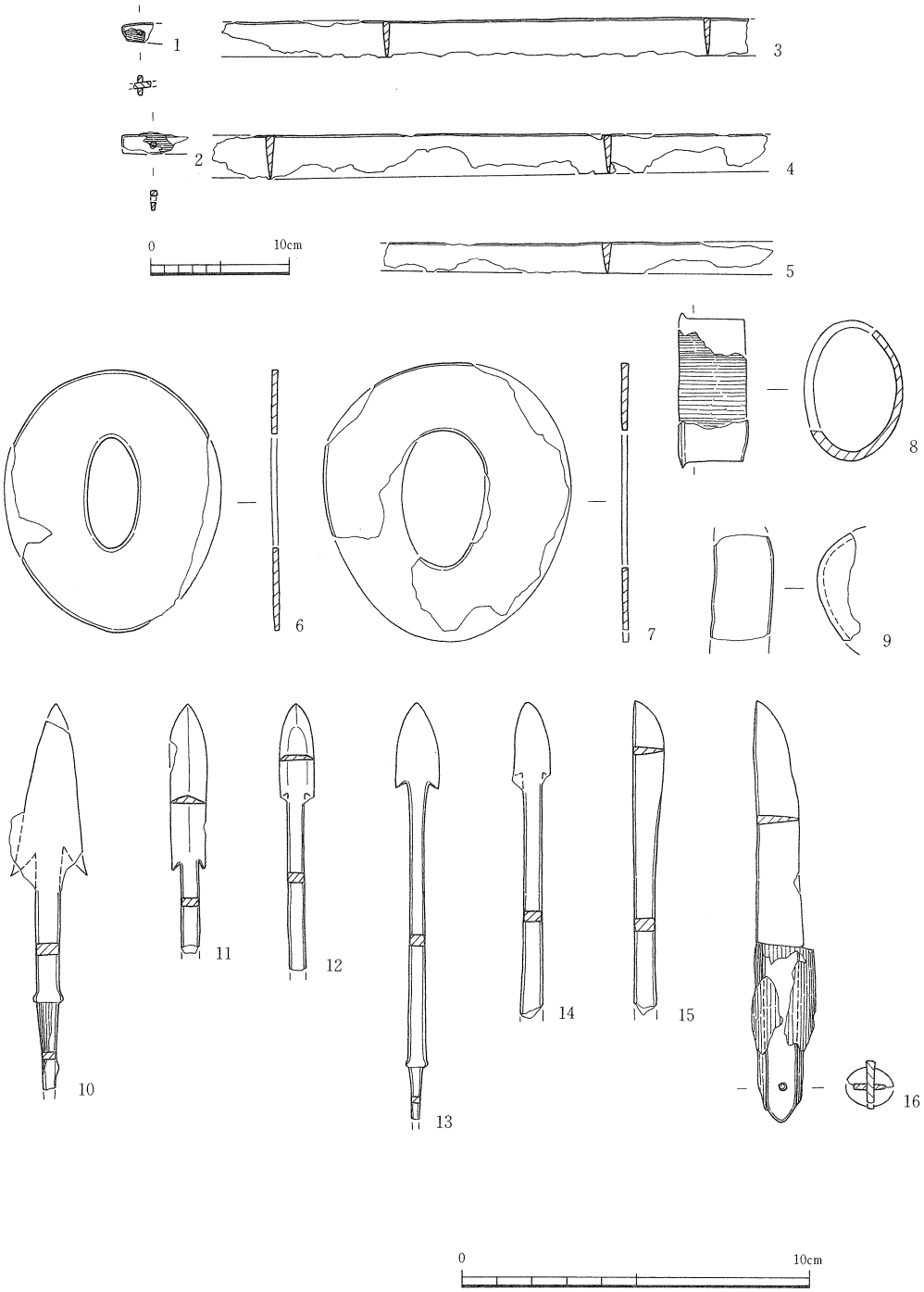
15は片刃式である。平刃で関を有さず，鏃身部幅は0.9cmである。

鹿角装刀子（16）　平棟平造りで両関を有し，茎には目釘が認められる。刃部長7.0cm，身幅1.4cm（関部），棟幅0.3cm，茎部長5.2cm，同幅1.0cm（中央部）である。

（3）まとめ

以上の出土遺物から総合的に判断して，本古墳の築造年代は６世紀後葉から７世紀にかけての頃と推定される。そのことは地下に設けられた埋葬施設の存在とも矛盾はしない。

ところで，本古墳の埋葬施設は壁が石積みであったとのことから横穴式石室である可能性が高い。そのように横穴式石室を地下に埋設する例は上流の栃木県域に多く認められ，そうした点は今後鬼怒川中流域における後期古墳の地域性を考える上で参考となろう。（滝沢　　誠）



第17図　仁江戸11号墳出土遺物実測図

4．別府遺跡

（1）立地と現状

別府遺跡は八千代町大字仁江戸1662～1664番地に所在する。香取神社古墳からは南に400ｍ程離れた位置にあり，南流する鬼怒川に向かって張り出した仁江戸の台地の最東端に立地する。

本遺跡は以前から土器片の散布が知られていたが，思いがけない土取り作業により残念ながら深く削り取られて，現地に急行した際にはすでに土器片が採集されるのみであった。以下に報告する資料は，そうした状況のもとで三度にわたる踏査を重ね，採集できたものの一部である。

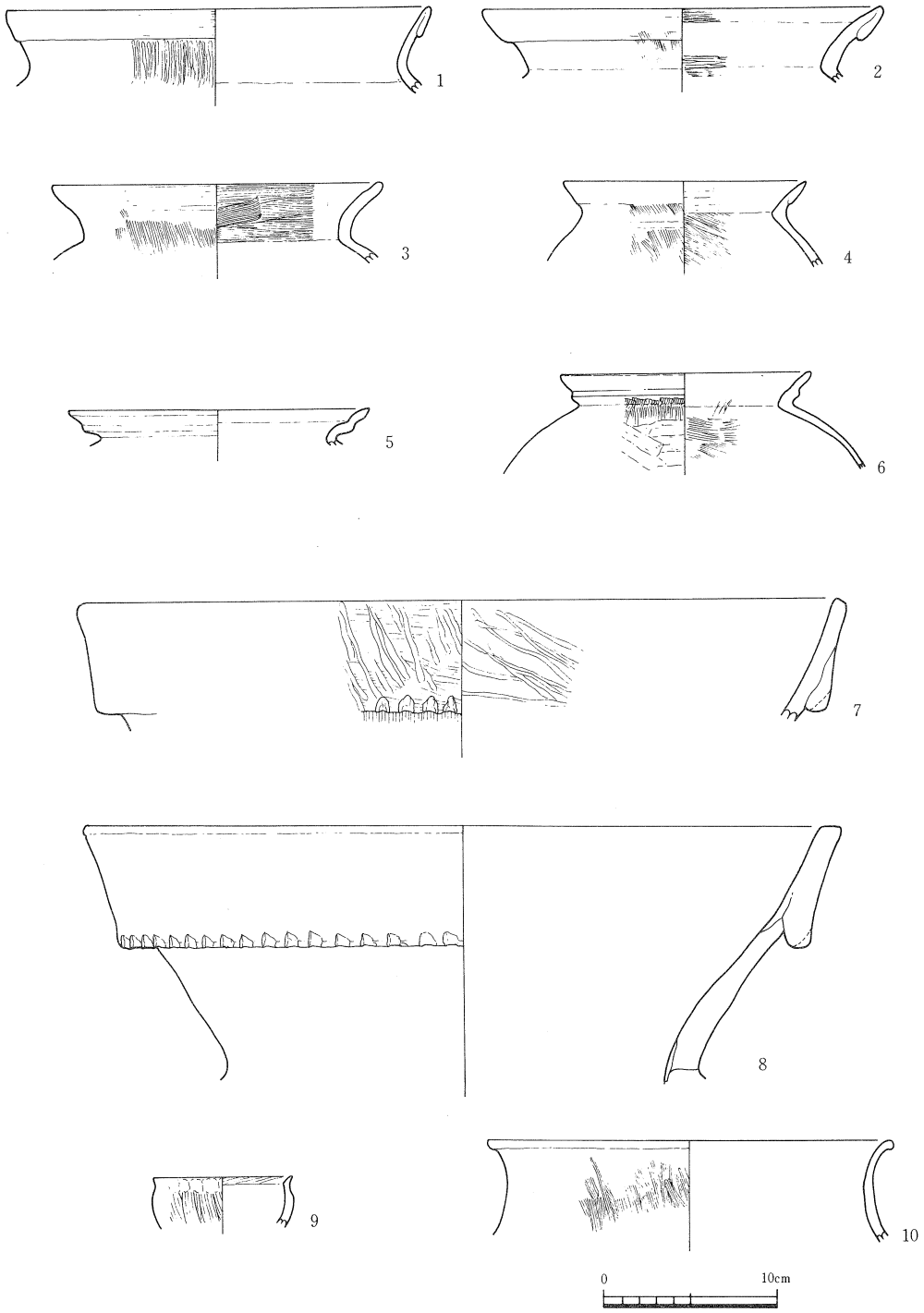
（2）遺物

本遺跡で採集した遺物の時期は縄文時代前期，古墳時代，奈良時代，平安時代にわたるが，古墳時代のものが大多数を占める。ここでは古墳群と関連付けてとらえる意味からも，古墳時代の遺物に限定して報告する。

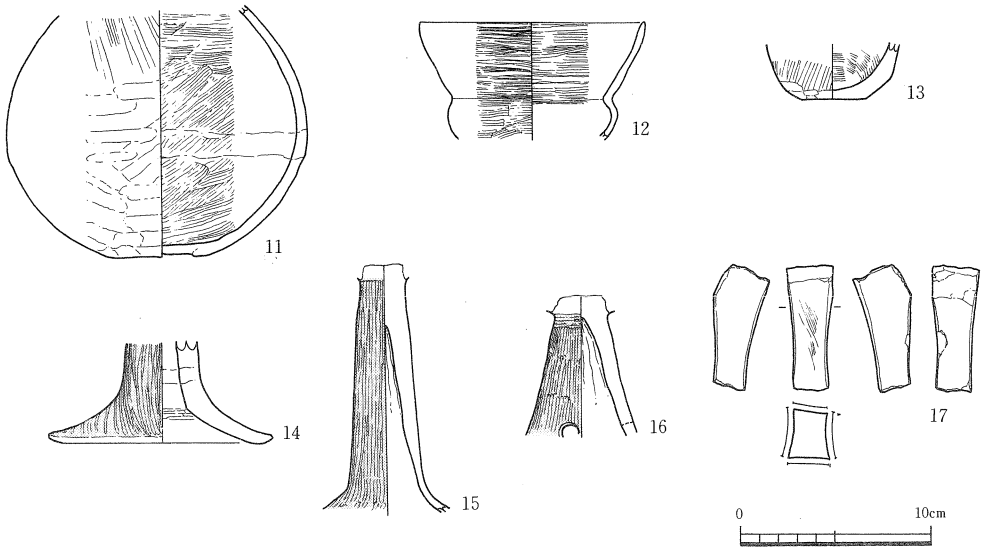
甕形土器（第18図１～６・10，図版８）　１，２はいわゆる「折り返し」口縁の口縁部片である。１は口径24.6㎝に復原される。口縁部にはヨコナデ，頸部には粗いヘラミガキを施し，また頸部内面には縦方向のヘラナデ，胴部内面には横方向のナデを施す。色調は暗黄色を呈し，胎土には白色の軽石粒を混入する。焼成は軟質で良好とはいえない。２は口径23.0㎝に復原される。外面に縦方向のハケを施したのち，横方向のナデを施す。また口縁部内面には横方向のハケを施し，頸部には横方向のナデとヘラケズリを併用する。胴部には横方向の粗いハケのち，ナデを施す。色調は橙色を呈し，胎土には砂粒，石英小粒を多く含む。焼成は不良で脆い。

３，４は単純口縁の口縁部片である。３は口径19.2㎝に復原される。口縁部はやや内彎しながら立ち上がり，外面にはハケの後，ナデ，口縁から頸部にかけての内面には横方向のハケを施す。色調は外面が黒色，内面が暗赤色を呈する。胎土には白色の粒子を若干含む。焼成は良好である。４は口径14.0㎝に復原される。折り返し口縁状に若干高まりをもつが，入念なヨコナデにより稜を成さない。頸部および胴部にはハケが施されている。頸部には横方向のナデが一条廻る。口縁部にヨコナデ，胴部に斜め方向のハケが施される。口縁端部は鋭く立ち上がる。色調は外面が暗褐色，内面が暗赤褐色を呈し，胎土は白色の粒子を含む。焼成は軟質で不良である。10は口径23.2㎝に復原される，口縁部片である。口縁部は直立気味に立ち上がり端部で外反し，口縁端部は面取りして，下端をわずかに下方へつまみ出す。その後，頸部，胴部には縦方向のハケを施す。口縁部にはヨコナデ，内面にはナデを施す。色調は褐色を呈する。胎土に白色粒子，砂粒を若干含む。焼成は良好である。

５，６はＳ字状口縁台付甕の口縁部片である。５は口径17.6㎝に復原される。内外面ともにヨコナデを施し，口縁端部は，やや丸く鋭さを欠いて仕上げている。色調は外面が黒褐色，内面が暗褐色を呈し，胎土には白色の粒子を若干含む。焼成はほぼ良好である。６は口径14.4㎝に復原される。頸部にハケが認められる。口縁部はヨコナデ，胴部は外面にヘラケズリ，



第18図　別府遺跡表面採集遺物実測図(１)



第19図　別府遺跡表面採集遺物実測図(２)

内面に粗い横方向のハケを施す。外面には黒斑がみられる。色調は暗褐色を呈し，胎土には石英小粒，長石粒を含む。焼成は良好である。

壺形土器（第18図７～８，第19図11，図版８）　７，８は有段口縁となる壺形土器の口縁部片である。７は口径44.4㎝に復原される。段部の貼り付けが明瞭に観察できる。外面には横および斜め方向のハケの後ヘラミガキを施し，内面にもナデの後不規則な斜め方向のヘラミガキを施す。調整後，段部には指頭端による刻み状のくぼみを等間隔に設け，その後棒状工具による整形を行う。頸部には粗いハケが認められる。色調は外面が赤褐色，内面が黒色を呈する。胎土には石英粒，径１㎜大の砂粒を含む。焼成は良好である。８は口縁部の25％が現存し口径43.8㎝に復原される。口縁部にはヨコナデを施し，口縁端部は平坦で，外面にやや張り出す。段部上半には横方向のナデ，下半には横方向のヘラナデ，頸部内外面には横方向のヘラナデを施す。断面を観察すると，口縁部，頸部，胴部がそれぞれに分離でき，内面でわずかな粘土を貼り付けて接合している状況が窺える。段部には右方向からヘラ状工具による刻み目を等間隔に施す。色調は外面が明褐色，内面が黒色を呈する。胎土には石英粒，長石粒を若干含む。焼成は良好である。

11は胴部の大半を遺存する。最大径16.2㎝と復原される胴部は，球形を呈し，底部はくぼむ。外面上半には粗い斜方向のハケを施し，その後全面に横方向のヘラケズリを施す。内面には粗いハケが認められる。色調は外面が褐色，内面は橙色を呈し，外面には煤が，底部には有機物が付着している。

埦形土器（第18図９・第19図13，図版８）　９は口径8.0㎝に復原される。口縁部から体部上半を遺存する。外面調整はは縦方向のハケで，その後，口縁部は端部直下を屈曲させている。

内面には横方向のナデを施す。端部付近は斜め方向のハケが認められる。色調は明褐色を呈し，胎土には白色軽石粒を含む。焼成は不良である。13は底部である。内外面にはハケ，底部にはヘラケズリを施す。二次的な焼成を受けたらしく，内面は煤が付着して極めて脆弱である。色調は暗褐色を呈し，胎土には白色軽石，酸化鉄粒を多量に含む。焼成は不良である。

坩形土器（第19図12，図版８）　いわゆる小形丸底坩で底部を欠失する。外面と口縁部の内面に横方向のヘラミガキを入念に施す。色調は橙色を呈し，底部には黒斑が認められる。胎土は緻密で，焼成は極めて良好である。

高坏形土器（第19図14～16，図版８）　いずれも脚部である。14は脚径12.0㎝に復原される。直線的に立ち上がる脚柱部と，大きく開く裾部からなり，脚端部には稜を形成する。外面には縦方向のヘラミガキ，内面には横方向のナデ，脚柱部と裾部の接合部には横方向のヘラナデを施す。色調は褐色を呈し，外面に赤色塗彩を施す。胎土には石英，長石，白色軽石粒を含む。焼成は良好である。15は細長い脚柱部と外反して開く裾部とからなる。外面には縦方向のヘラミガキの後，赤色塗彩を施す。16はやや開き気味で，14，15と比較すると幅広である。外面には縦方向のヘラミガキ，坏部との接合部には横方向のヘラミガキが認められる。円孔を３ヶ所に穿ち，外面には赤色塗彩されている。

砥石（第19図17，図版８）　４面使用されている。石材はシルト質の砂岩である。

（３）まとめ

以上，表面採集資料ではあるが，比較的まとまった遺物が得られた。図化したもののほかに器台の破片とみられるものがあり，土師器はすべて五領式の範疇で把えられるものである。

このうち特筆すべきものとしては，「東海系」のＳ字状口縁台付甕があげられる。Ｓ字状口縁台付甕の出土例は，県南地域ではこれまであまり知られていなかったが，近年では，谷田部町境松遺跡（久野　1987），竜ケ崎市南三島遺跡（小山　1989），新治村上坂田遺跡，同梶の宮遺跡（増田・岩崎ほか　1986），石下町国生本屋敷遺跡（阿部　1988）など，各地で確認されるようになってきた。本遺跡出土のものは，口縁部の形状が崩れ，胴部はヘラケズリによって整形されるというように，型式的には後出のものであるが，今回報告した下館市鎌田遺跡の例とともに，この地域での確実な分布を裏付けるものである。

ところで，仁江戸古墳群の立地する台地上では，これまで古墳時代後期以降の遺跡は確認されていたが，今回香取神社古墳とともに前期に遡る集落の存在も確認することができた。近年この別府遺跡から３㎞程南の石下町国生本屋敷遺跡で発掘調査が行われ，方形の濠に囲まれた古墳時代前期の竪穴住居址４軒が検出された。同遺跡は鬼怒川の右岸台地上に立地し，そこから１㎞北方の同じ台地上にはかつて全長72ｍ程の東山塚古墳が存在した。東山塚古墳は古墳時代前期の築造とみられ，当該期における首長層の墓地と居住地という観点から国生本屋敷遺跡との関係が考えられている。香取神社古墳と別府遺跡についてもあるいはそうした観点からの把握が可能であるのかもしれない。　（白石　典之）

Ⅳ 総　括

茨城県南地方の古墳調査成果の一部について記述してきた。ここで煩を厭わず，再度調査古墳の要目を列記することからまとめにかかることにしたい。

実測した前方後円墳のうち今回報告したのは4基である。この中で，結城郡八千代町香取神社境内の台地縁部に築かれた香取神社古墳は，これまでにその存在が知られていないものであった。主軸方位をN6°Eにとるこの古墳は，全長70m，後円部径45m，同高さ5.5m，前方部前端幅14.4m，同高さ2m，前方部と後円部の比高はおよそ3.5mであった。

この古墳でとくに注目されたのは，墳丘裾に壺形埴輪を立て並べたと思われる点であるが，赤彩されたそれらは，壺形埴輪本来の姿から大きく変形したものと認定された。

下館市徳持の小貝川筋に近い沖積低地に築かれた葦間山古墳は，後円部径82m，高さ10.5m，前端部ならびに側面ばかりか頂部をも削られたと思われる前方部は，現存長約30m，高さ約3mを計測した。主軸方位をN43°Wにとるこの古墳の全長は本来141m程であったと推定できる大規模なものである。前方部頂の若干が平夷されたとしても，それが2mを超えるとは考え難いから，後円部との比高は5m以上であり，低い前方部の存在をこそ強調しておきたい。

葦間山古墳の墳丘には，赤彩された壺形埴輪に加えて，円筒状のものも樹立されていた可能性もある。ただ，円筒状のものに穿たれた透かしの円孔は，径2cm内外の小さなものであったことに注意する必要があろう。いわゆる特殊器台系の円筒に穿たれる「巴形透孔」が小孔であることを想起せずにはいられないからである。

葦間山古墳の南東約1.2km，真壁郡明野町の台地縁には，灯火山・台畑両古墳が所在する。より古いと思われる灯火山古墳はすでに破壊されてしまった。台畑古墳は前方部端が僅かに削り取られているが，現存部の全長72m，後円部径36m，同高さ6.5m，前方部前端幅28m，同高さ4.5m，前方部と後円部との比高はおよそ2mである。後円部裾と頂部に若干の変形が見られるが，概して良好な保存状態と言ってよい。にもかかわらず，埴輪片，土器片の類は全く発見されなかった。

宮山観音古墳は台畑古墳と川筋を異にするが，同じく明野町の台地縁部上に立地する。前方部前面を谷に向けている点は台畑古墳と異なる。全長92m，後円部径45m，同高さ6m，前方部前端幅40m，同高さ3.7m，主軸方位はN72°Eである。墳丘に関してとくに目立つのは段築の存在である。なお，土器，埴輪等は発見するに至らなかった。

以上の古墳の編年的位置については各項に詳しく述べた通りである。総じて言えることは，葦間山古墳が後円部径よりも前方部長が短いほかは，すべて6：4：2型，即ち前方部長と後円部径がほぼ等しく，長大な前方部をもつ古墳に属するという点である。このようなプロポーションは，関東地方などの5・6世紀の古墳に広く見られるところである。地方にあって特定

プロポーションの古墳が持続することに言及した甘粕健の見解（甘粕　1966）を思い起こす必要があるのだろうか。

ところで，我々が県南地方の古墳調査を思い立ったのは，創設された筑波大学が『常陸国風土記』にいう筑波国の地にあったことに深く関わっている。「開かれた大学」という建学の精神とも関係することだが，地元教育委員会と相携えて，「地域国家」といわれるものがどのような実体を持つものかを考古学的に明らかにする方法を確立しようういう意図をこめてのことであった。

昭和53年から始まった4年の調査により，現筑波郡の広がりの中に，恐らくは筑波国に結びつくであろう4世紀末から6世紀に至る歴代首長墓の存在を明らかにし得た。この成果から帰納されるのは，筑波国の広がりは現筑波郡域とほぼ近似したものであったろうということであった。

その後，調査が筑波郡域外に移るに従い新たな問題に逢着した。即ち，結城郡，真壁郡などにも幾多の前方後円墳が存在し，そこにもまた政治圏の広がりが想定されるのだが，下総国に編入されたりする結城郡を除いても，なおそれらは『常陸国風土記』に記載された国々に属しそうにもない空間と見られたのである。そればかりか，葦間山古墳などは，想定される筑波国中枢部のどの古墳よりも規模が大きいのである。

古墳規模の大小が往時の権力の強弱を反映しているという立場からすれば，これらの古墳を筑波国傘下に組み込んで考えようという安直な解釈は採り難くなる。『常陸国風土記』には登場しないが，かつての常陸の地には，ほかにいくつかの「国」が存在したと見るのか，はたまた，新治国，筑波国など風土記に記載された国の広がりが，当初に予想したよりもはるかに広く，しかも既に重層的な支配構造が形成されていたとするのか，今後十分に考究する必要が生じた。そして，後者の立場をとる場合は，域内の政治権力中枢の移動を思わせるものがある点にも留意しなければならない。都出比呂志の提言（都出　1988）がこの地でも適用しうるか否かの検証がとくに重要となるだろう。

上記の課題は，前方後円墳の調査を組織的に進めることにより解決し得ることである。一方古代筑波国の政治，社会構造をより正確に把握するためには，群小円墳群の調査も併せ進める必要がある。この分野については，つくば市筑波地区に所在する平沢・山口両古墳群の調査に続いて新治郡新治村下坂田古墳群を早く調査したほか，今回基礎調査を終えた仁江戸古墳群について若干の見通しを得たに過ぎない。

この地方の円墳群には50基，100基といった大規模群集墳が見られず，また，墳丘外地表面下に埋葬施設を有するという極めて顕著な地域性を示すものであり，これらの広がりについて今後一層注目する必要がある。

古墳の被葬者を上部階層とみてよければ，歴史の主体者として圧倒的多数を占めた民衆にも正当に照明を当てなければならない。その意味では集落跡の調査が望まれるのであるが，現在の我々の体制では到底そこまでは及ばない。この面を補う方法の一つとして各地で出土した古

墳時代土器の詳細な調査がある。

今回は，4世紀に中心を置く別府遺跡，鎌田遺跡の2遺跡から出土した土器を取り上げ，この地域でも4世紀の頃東海西部地方の土器，あるいはそれを模倣した土器が数多く使用されていたことを明らかにすることができた。

しかし，一方では新治郡新治村上坂田遺跡の方形周溝墓例（設楽　1988）に見られるように，この地域には南関東地方から波及した土器もまた数多いことが知られるのである。これら異系統の土器分布を追究して行くことも国家形成過程と，その段階における民衆生活を把握する上で重要な課題である。

思えば我々の古代地域史研究は，その前史も含めて発足以来十数年の年月を経た。その間，主に首長墓と想定される古墳の測量調査を中心として研究を進めてきた。しかし，筑波国とその周辺までを見渡すと，その完成までにはまだ多くの日時を必要とする。ましてや，古墳群の測量ともなればより長い年月を要することは明らかである。

このような測量調査は最も基本的な研究であり，年月を費やしても継続して行わねばならないが，それとともに，古墳及び同時代の遺跡を対象として地域毎に分布調査を進めることも検討する必要がある。分布調査は，測量調査と比較した場合，個々の古墳の資料的内容では及ばないが，短い期間で全体的傾向を見通し得る利点を備えている。さらに，分布調査の成果検討に立脚し，より重点的に個別古墳の調査を進め，研究の深化を図ることが可能となろう。ただし，分布調査といえども一朝一夕にできるものではなく，かなりの期間を必要とするし，内容に限界があることは言うまでもない。

このように思いめぐらしてくると，古代地域史解明のための共同作業は，今後さらに息長く継続する必要ばかりが感じられるのである。そして，この調査を通じ，また報告書を介して，同じ歴史の基盤に立ち，同じ歴史を考える中で，宮山観音古墳の整備計画に見られるように，この地域の人々との絆が少しずつ強まっていくことを喜びとして受けとめたいのでのである。

（岩崎　卓也）

文　献

阿久津久・山野井哲夫ほか　1983　『倉持遺跡－第１年次調査－』明野町教育委員会

赤塚次郎　1986　「Ｓ字甕について」『欠山式土器とその前後』第３回東海埋蔵文化財研究会　310～315頁

明野町史編さん委員会　1985　『明野町史』

明野町史編さん委員会　1983　『明野町の遺跡と遺物』明野町史資料集第７集

阿部義平　1988　「石下町国生本屋敷遺跡の発掘調査」『歴博』第32号　８～９頁

甘粕　健　1964　「前方後円墳の性格に関する一考察」『日本考古学の諸問題』173～202頁　河出書房

池田　宏　1981　「筑波地方の地形環境」『筑波古代地域史の研究』７～11頁　筑波大学

稲村　繁　1986　「群馬県における馬形埴輪の変遷－上芝古墳出土品を中心として－」『MUSEUM』425号　４～20頁

岩崎卓也　1982　「Ⅱ　調査・研究の経過」『筑波古代地域史の研究』４～６頁　筑波大学

岩崎卓也・谷中隆ほか　1989　「太田古墳」八千代町埋蔵文化財調査報告書４

上田宏範　1979　『前方後円墳』第２版　学生社

上田宏範　1985　「前方後円墳における築造企画の展開　その五」『末永先生米寿記念献呈論文集』乾　281～307頁　末永先生米寿記念会

大塚初重　1974　「芦間山古墳」『茨城県資料　考古資料編』69～70頁

大塚初重・小林三郎　1964ａ　「茨城県勅使塚古墳の研究」『考古学集刊』２巻３号　103～122頁

大塚初重・小林三郎　1964ｂ　「茨城県舟塚山古墳の性格」『考古学手帖』22

大塚初重・小林三郎　1968　「茨城県舟塚古墳Ⅰ」『考古学集刊』第４巻１号　93～114頁

大塚初重・小林三郎　1971　「茨城県舟塚古墳Ⅱ」『考古学集刊』第４巻４号　57～103頁

大場磐雄・佐野大和　1956　『常陸鏡塚』國学院大学考古学研究報告第１冊

大村　直・菊池健一　1984　「久ケ原式と弥生町式」『史館』第16号　97～113頁

大森信英ほか　1975　『上出島古墳群』岩井市教育委員会

小瀬康行　1981　「菅間大塚山古墳」『筑波古代地域史の研究』56～58頁　筑波大学

蒲原宏行・松尾昌彦　1981　「桜塚古墳」『筑波古代地域史の研究』21～27頁　筑波大学

上川名昭　1975　『茨城県筑波町山木古墳』茨城県考古学会

川上博義ほか　1974　「古墳時代遺跡地名表」『茨城県資料　考古資料編』449～497頁

川西宏幸　1988　「円筒埴輪総論」『古墳時代政治史序説』塙書房

久野俊度　1987　『主要地方道取手筑波線道路改良工事地内埋蔵文化財発掘調査報告書　境松遺跡』茨城県教育財団文化財調査報告書第41集　（財）茨城県教育財団

車崎正彦　1976　「常陸舟塚山古墳の埴輪」『古代』第59・60合併号　38～49頁

小森紀男　1980　「栃木県における五領式土器の研究」『宇大史学』第２号　宇都宮大学史学会

小森紀男　1984　「古墳出現期の芳賀地方」『真岡市史案内』第３号　41～59頁　真岡市史編さん委員会

小山映一　1989　『竜ケ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書　南三島遺跡 3・4 区（Ⅱ）』茨城県教育財団文化財調査報告書第49集　住宅都市整備公団・つくば開発局　（財）茨城県教育財団

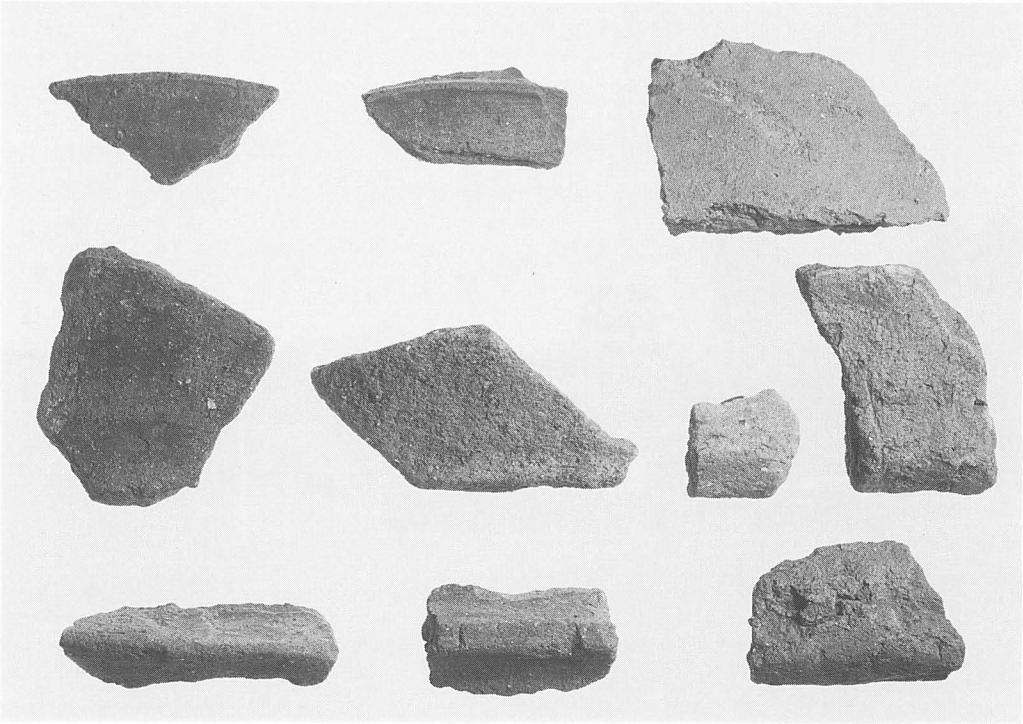
斎藤　忠　1974　「佐自塚古墳」『茨城県史料』考古資料編　古墳時代　147～149頁

斎藤　忠ほか　1960　『三昧塚古墳』茨城県教育委員会

塩谷　修　1985　「茨城県における埴輪の出現と消滅」　第6回三県シンポジウム『埴輪の変遷』261～278頁　群馬県考古学談話会・千曲川水系古代文化研究所・北武蔵古代文化研究会
設楽博巳　1987　「常陸地方における方形周溝墓をめぐって」『比較考古学試論』筑波大学創立十周年記念考古学論集　191～238頁　雄山閣
下館市史編纂委員会　1968　『下館市史』上巻
下館市教育委員会　1985　『下館の文化財』
瀬谷昌良　1990　『灯火山古墳確認調査報告書』明野町埋蔵文化財発掘調査報告書第3集　明野町教育委員会
都出比呂志　1988　「古墳時代首長系譜の継続と断絶」『待兼山論叢』史学篇　第22号　1～16頁
中村　勉ほか　1981　『鴨居上の台遺跡』横須賀市教育委員会
西宮一男　1969　『常陸狐塚』岩瀬町教育委員会
増田精一・岩崎卓也ほか　1986　『武者塚古墳』茨城県新治村教育委員会
茂木雅博ほか　1976　『常陸浮島古墳群』浮島研究会
茂木雅博ほか　1979　『常陸八幡塚古墳整備報告書』八幡塚古墳調査団
諸墨知義ほか　1984　『鎌倉公園遺跡』大宮市遺跡調査会
山野井哲夫　1987　「古墳時代の八千代」『八千代町史（通史編）』85～113頁　八千代町
若松良一　1986　「人物埴輪腕の製作技法について」『瓦塚古墳』埼玉古墳群発掘調査報告書第4集　87～88頁　埼玉県教育委員会

図　　版

1.葦間山古墳全景（西から）

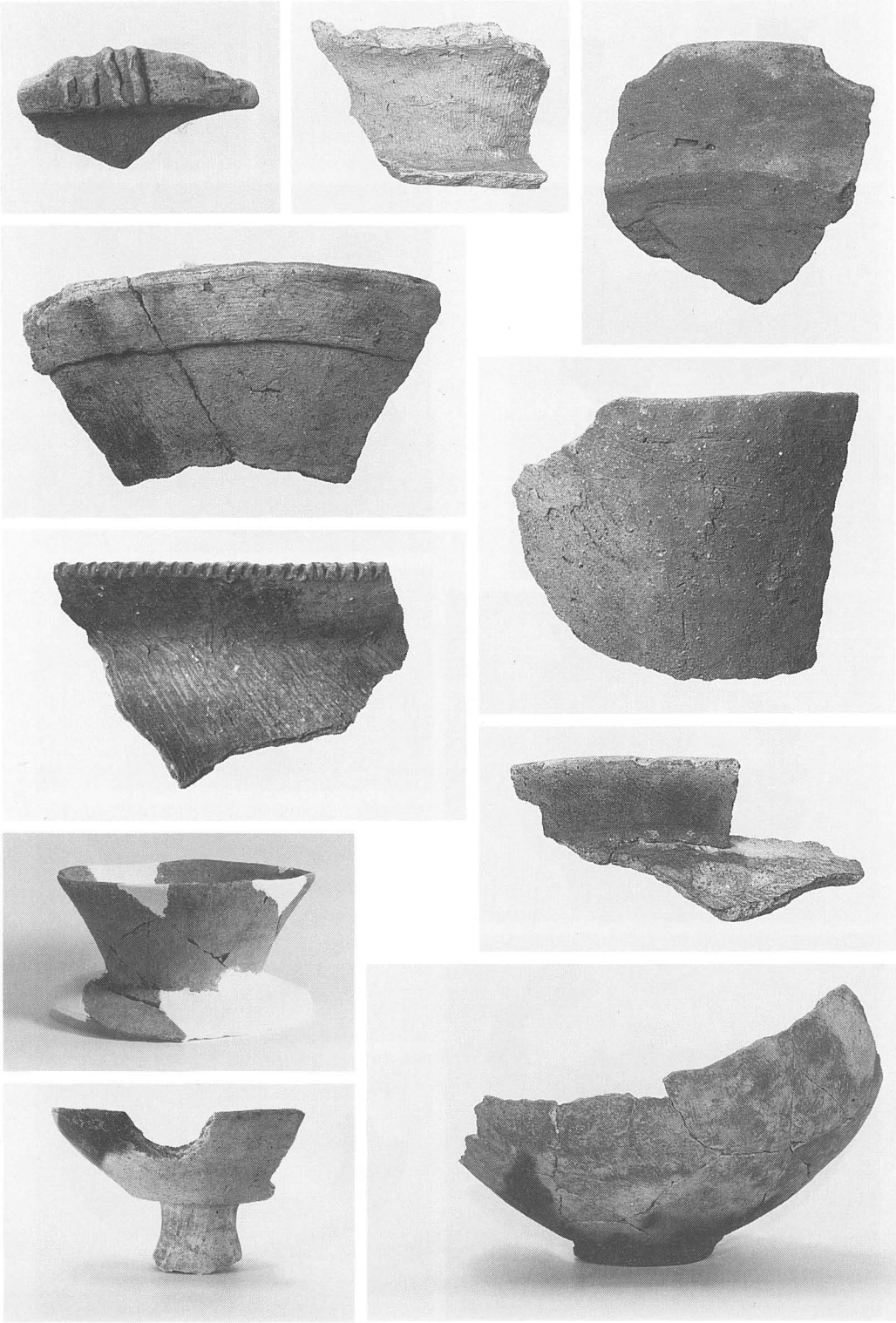


2.表面採集遺物（½）

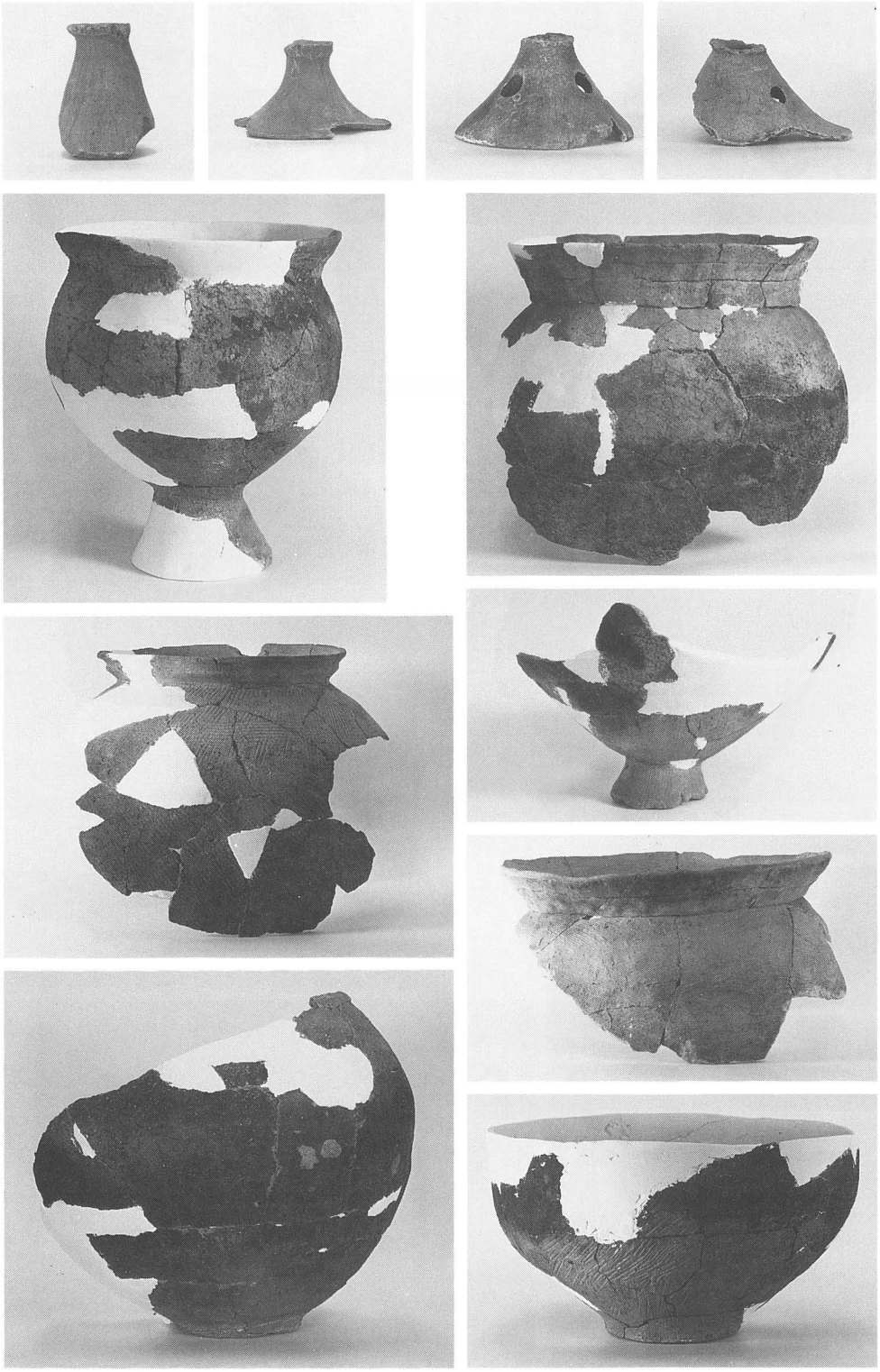
図版2　台畑古墳

1.台畑古墳全景（西から）

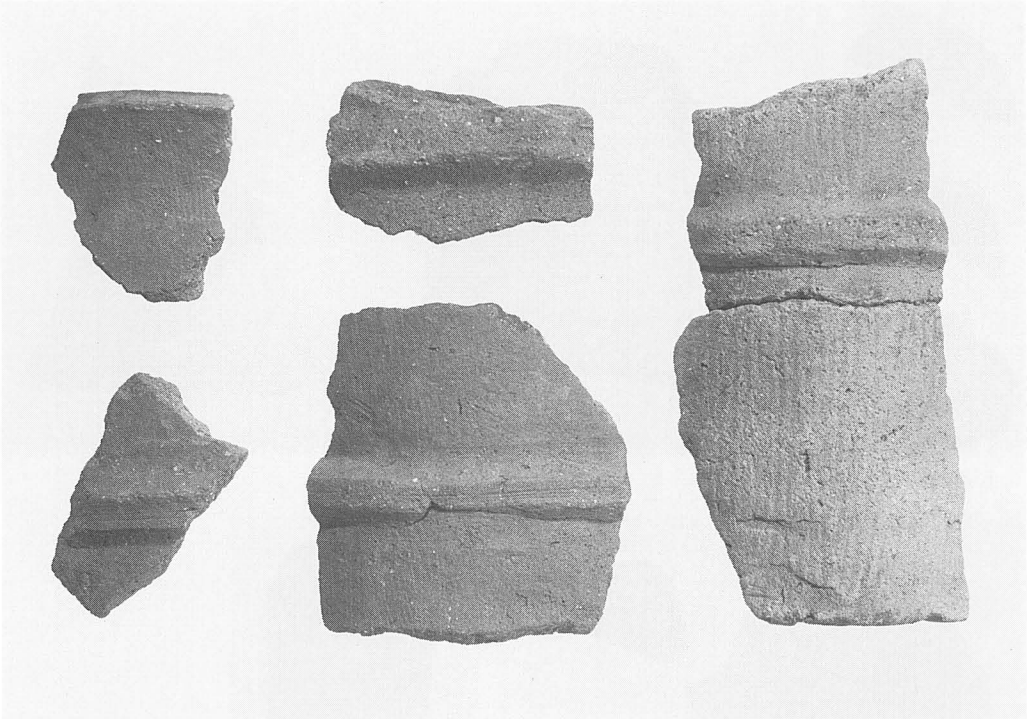
2.灯火山古墳全景（西から）



土師器（¼ただし破片は½）



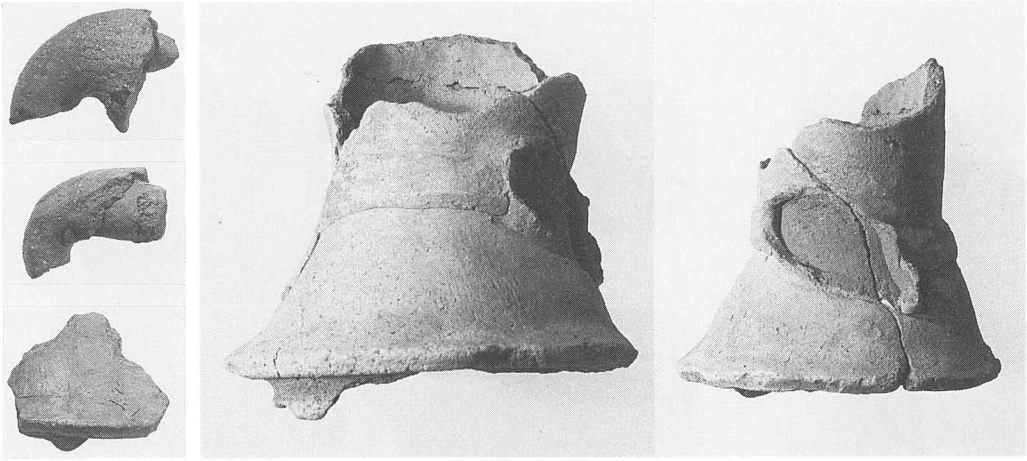
土師器（1/4）



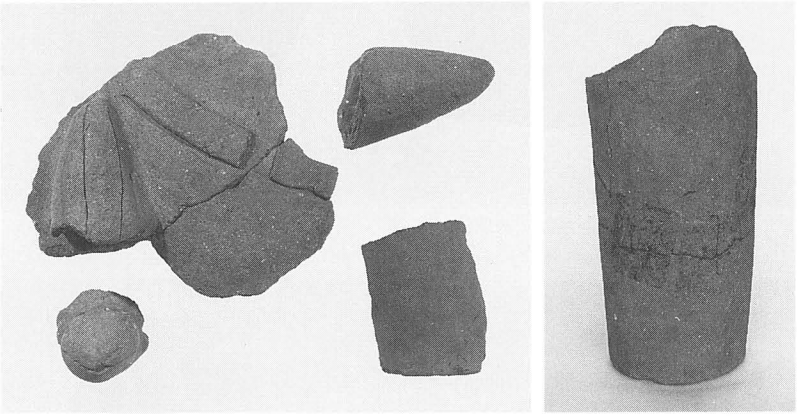
1.円筒埴輪（½）

2.人物埴輪（¼）

図版6　鷺島古墳・宮山観音古墳



1.人物埴輪（1/4）



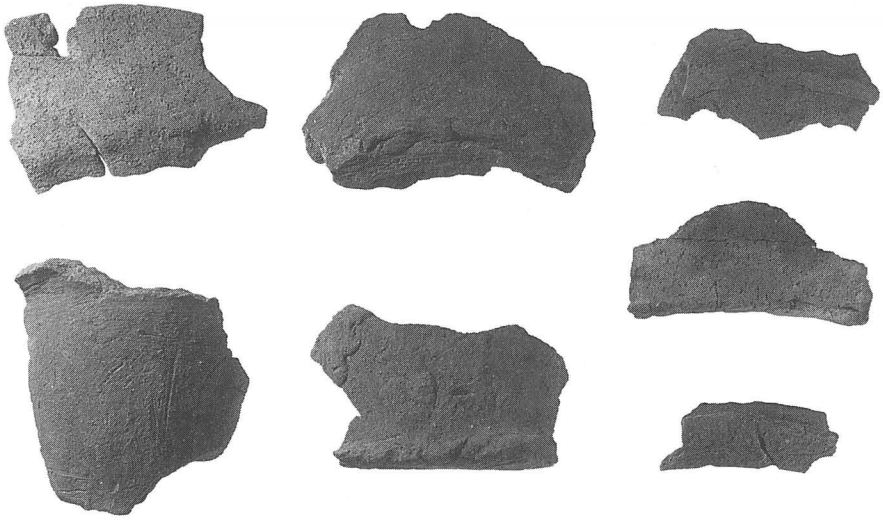
2.馬形埴輪（1/4）

3.宮山観音古墳遠景（南から）

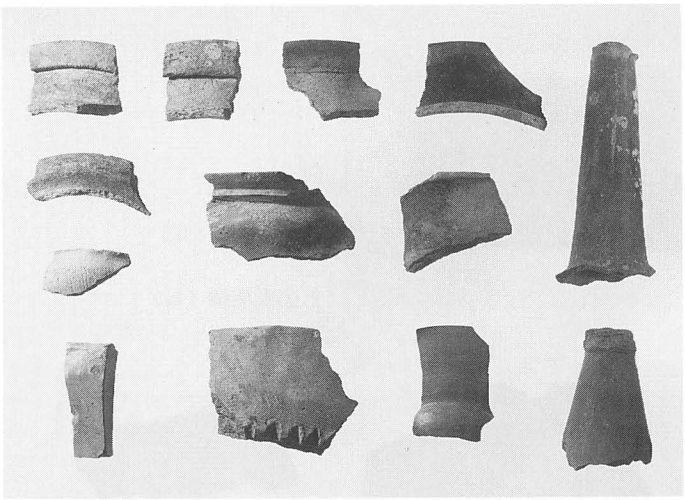
図版7　香取神社古墳

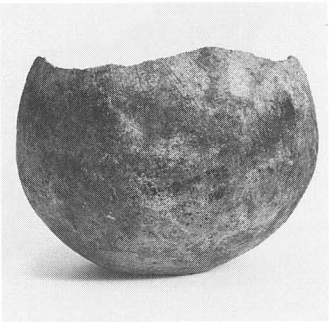
1.香取神社古墳全景（西から）

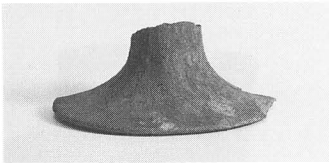
2.壺形埴輪（1/4）



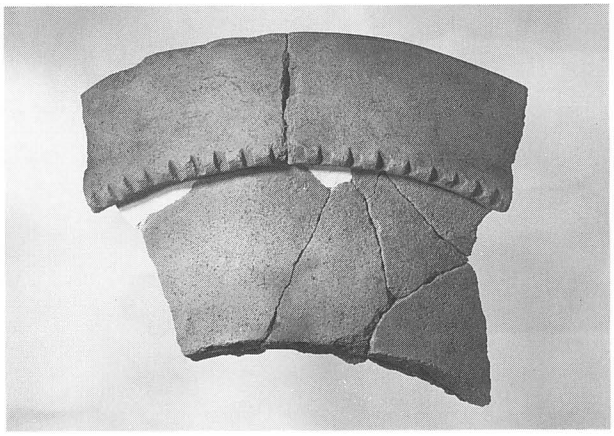
1.壺形埴輪（½）







2.土師器・砥石（¼）



筑波大学先史学・考古学研究調査報告　5

古 墳 測 量 調 査 報 告 書　Ⅰ

―茨城県南部古代地域史研究―

1991年3月　　発行

編　集　　西野　　元

発　行　　筑波大学　歴史・人類学系
〒305　つくば市天王台1－1－1

印　刷　　株式会社　イ　セ　ブ
〒305　つくば市天久保2－11－20